

色曆

泉鏡花作

一

月の良い夜であつたが、やゝ更けてから露が煙つて、薄雲が野山を包んだ。粟、麥、蕎麥などの棚田なぞへに、松の黒い小山がある。――蕎麥の莖は、未だ色附ぬが、粟は黄金に、麥の萌葱、色紙形にすらりと竝んで――霧の晴れた夕暮など此處は殊に美しい。けば／＼しくない、濡れた、しつとりした色の其の調子は、何やら沈んで、陰氣にももの寂しく、古い伽藍の合天井に描いた繪らしく見えるが、早出の鴉が、東雲に、きよつ／＼と鋭い鑿で穿起すやうにすると、ふと目を覺した風情で、雲の中に白玉の露と共に、はつと浮上る。

夜は恁うして、粟も麥も、畦で隣の劃を付けた薄の穂の、ふうわりと仄白い蒲團を被いで、すや／＼と寐て居るので、姿も色も朦朧とするのであらう。

時々思出したやうに、峰の松からさら／＼と風し、
稻田の上を颯と渡つて、冷たい爽な風が吹く
と・・・・水には繪の具の浸むやうに、地には刺
繡の絲の縫れるやうに、霧の裏にほつと息して、恍
惚と色に出で、穂に顯るゝ、ト月影が蒼く映す。而
して露が、白露が亂るゝ。

其の後から、直ぐに又霧に睫毛を合はす。此を見
れば、全く覺めたのではない。粟や、蕎麥や、藍の
花が辿る、夢路の其が一里塚で、折々人の目に觸れ
るらしい。

とも渠等は知るまい。・・・・同じ事で、人の
知らぬ夢の光景は、又草木が見て居ようも計られぬ。

いで、此の里に、粟田蕎麥畑は此處には限ら
ぬ。・・・・今時分は何處の谷戸にも見懸けるが、
朝夕の景色、夜の状の、こんなに目に立つて風情の
ある處は殆どない。

何故か。

其も谷戸々々の奥深く、麓を潛つて、人里離れた處でゞもあれば、茄子も紫の俤に立つこともあらう。．．．此の一廓は人家に近い、人家も、葦屋茅の門と言ふにこそ、居周圍には當世の別荘が幾干もある。然も、鐵道の線路が草を貫いて、下の土手をづつしりと向うの山の根へ走つて居る。

此の力ある鞭には、宙を蔽ふ霧も、黒く且つ輝く其の凄まじい鐵を包みあへず、犇と二條に挫がれて、草の生に白泡を噛んで喘ぐ。．．．遠くから海の波が此處へ響いて、矢聲を掛け、力を合せて、勿返さんづ氣勢があるのを、鐵路は呻唸つて、引敷いてビクともしない。而して冷やかな露を浴せて、大空に雲の懸つた月にさへ、劍の如く晃々して、數々人の生命を奪る。．．．分けて此の線路は婦を殺す。

今年も五月雨の頃から、つい夏の末までに早や三人と言ふ。

近い處のものもあり、わざ／＼東京から死に／＼來

たのもあつた。 年々の事は數へ切れまい。土地の人たちは又かと言ふほど、不思議に此の線路で事が起る。

雨夜の闇に、一人の女の仇白い亡骸を、弓張提灯で窺ひながら、検屍の醫者が、村役場の書記、停車場の巡查などの立合つたのに向つて、

「奇代に其の、此の土手で死ぬと云ふのを、僕は研究したがね、彼處のそれ、踏切に打つた柵ですよ。御覽なさい、妙に人が立つてるやうに見えませ

う。 だから人が立つて居ても杭に見える と云つた勘定でね、人だか杭だか分らないのです。通りがりのものにも、一寸は知れず、運轉手の目にも入らない。見えた處で、杭だらう、と思ふ。と不意に飛込む。だもんだから、留める間も、見着ける隙もないのですよ。確かに其の所爲に違ひない。」

と言つた。

あはれな怪我人の手當をするより、場所の研究が
 醫師にも先に立つほど、人も果敢ない、露も脆い秋
 草の線路かな。

で、人が杭に紛ふと聞く、踏切の柵は、海の方へ
 向いて、土手の切目に、松並木も何も無い、あから
 さまな、寂しい街道を切つて、其處に見える。が、
 かつきと折れたり、ひよろりと傾いた杭もあつて、
 眞黒な橋が崩れた形の、其の中を透す街道は、霧が
 あつても田畠に分れて、一條秋の水の流るゝやうな、
 其の上あたりを、銀河が中空に松を浮べて、巖を打
 つ海に灌ぐ。

其の柵の柱の許に、月が晴れると、烏に化けて啼
 きさうな穂薄が、一本ふら／＼と悪くイむ。

其處へ立つて、汚れた白旗を振るかと思へば、
 あゝ、秋は寂しい。・・・掘立小屋同然な、其
 で。も板葺屋根の、附木細工のやうな番小屋がある

が、霧に埋れて、線香ばかりの灯も見えぬ。

「こん／＼、こん／＼。」

田畝に響いて可訝な聲して、旗振の女房が晝の内針仕事をしながら、お市に、豆捻、微塵棒などを竝べて賣る、廂の出つ張り、寢静まつた窓口へ、突立つたものがある。

「こん／＼、今晚は、狐です。はゝはゝゝ、こん／＼ちきでござい、はゝはゝゝ。べらぼうめ、手前の方からこん／＼ちきなんて云ふ奴があるかい、恐怖くも變哲でもねえ。いや、狐です、今晚は。――

はゝあ、よく寐て居る、覗いて遣れ、とこまかせの、やつとこな。」

と一つ、踏直したのは切緒の草鞋で、足拵へのきりゝとした奴、ぴたりと板戸に顔を附着けたが、

「いよう、灯なし、あから三寶、此奴あ眞暗三寶の反對だ。お月様が世間を忍んで映つてら、お喧しいうござい、お邪魔様。はい、然やうなら。」

と切離したやうに翻然と退いたが、ふら／＼と横

歩行^あきで、街道斜^{かいだうなぐめ}に、柵^{さく}に添^そひつゝ、
「汽車^{きしや}でも來^きやがれ死^しんで見^みしよ。」 と低聲^{こしゑ}の
鼻唄^{はなうた}。

扮装^{なり}はと見^みると、其^その引緊^{ひきしま}つた股引^{もひき}の上^{うへ}は、肌寒^{はださむ}
を物^{もの}ともしない、腹掛^{はらがけ}ばかりの半裸體^{はんらたい}。シヤヴルを
一挺柄短^{てうえみじか}に取^とつて、半纏^{はんてん}を一寸疊^{ちよつとたゝ}んで、ひよいと引^{ひつ}
掛^かけたのを肩^{かた}にしたのを、野掛^{のがけ}の煙管^{きせる}、横銜^{よこくは}へに輕^{かる}
く持^もつて、荷^ににせず。きちんと極^きまつた腰^{こし}の骨^{ほね}に、
兩提^{りやうてい}ばかりがぶらりとある、究竟^{くつきやう}な若い^{わか}もの、何處^{どこ}
で飲^のんでまぐれて來^きたか、山飛伊之助^{やまとびいのすけ}、可^い機嫌^{きげん}。

「ほい、薄^{すす}か。」
と上^{うへ}から見^みて、

「可^い厭^やに氣取^{きと}るぜ、畜生^{ちくせい}め。おつと畜生^{ちくせい}ぢやねえ、
草^{くさ}だ、草^{くさ}め。へゝゝ、これは御念^{ごねん}の入^いりました事^{こと}で。
變^{へん}にふら／＼招^{まね}きやあがる。私^{わつし}あ又^{また}死神^{しにがみ}かと思^{おも}つ
た。．．．．．あれ、止^よせやい、氣障^{きざ}に擦^{こす}りつくぢ
やねえか、．．．．．此奴^{こいつ}。」

と膝^{ひざ}を突張^{つゝば}つて、輕^{かる}く蹲^{しゃが}んで、薄^{すす}の穂^ほを頭^{あじ}でしや
くつた。

「手前だな、恚う、ヤイ此の土手で人を奪るのは。悪い奴だ。が、洒落れた奴だ。新造をがんとめらすからよ。……一番人助けに薙倒してくれるかな。餘り他愛がねえ、些と條鐵を入れるい。何てしつこしのねえ、ひよるけた風だ。尤もな、腰の強え死神もあるめえけれどよ。……野郎、餅と間違えてやがらはゝゝ。

今夜は伊之さんがお相方だぜ。恚う、後生だから切めて西瓜にでも化けてくれ、眞桑瓜でも可い、南瓜と相撲が取りてえや。此の可い心持を遣瀬がねえ、所在がねえ。むゝ、處で勿論、錢がねえ。

何、其の通りだ、と此奴、合點々々をしやあがる、……馬鹿にするない。馬鹿にやしめえが、客にもしめえ、なあ、姉え。其の氣で木賃と出掛け。せ。おう、休みねえ、手前も睡いや、えゝ、薄ちやん。」

と頬摺れの穂を平手で撫でると、もさりと觸つて、「はつくしよい。」

伊之助は反身に立つた。

「ほい、畜生め、と矢張り此奴あ畜生めだ。噫が草めぢや納まらねえ。何の道新造ぢやねえからな、構つたつて仕様がねえ。飛んだ愛想づかしたね、悪く思ひなさんなよ。今に月が出ら、澤山遊びねえ。

あい、あばよ。」

と其のまゝ上の山の、出張つた裾をついと切る。帽子は被らず、手拭で向顛巻した四角いやうな天窓が、草の伸びた中に隠れたと思ふと、びつしより濡れた露を拂つて、下から土手の上へ背を高く、轟乎と出て、海も地も呪詛ふ聲の、足許に轟くやうな、底光りのする線路の中を、憚る色なくのさ／＼と歩行き出す。

曰く附きで逡巡するから、日の中も餘り人通りは無いが、停車場へ向いて町へ出る近路である。

伊之助は、足許を見るでもなく、其でもしやんとして居るのに、故と自分が肩を揺つて、稻田の霧を

見透しの――雁が渡ると島に成る――里の
家の屋根の、月影に寂寞したのを、ふら／＼視めて、

「寐やがったな、見ねえ、から、だらしのねえ事！
あつぶすつぶ騒いでるのも高々宵の内だぜ。・
・生きてるのか死んでるのか見當が付かねえく
れえだ。お百姓も髭手合も、頼むぜ、恚う。・
・些と確乎しろい。何のためのお月様だ、偶にや
夜遊でもしねえな、山寺の坊さん鐘でも撞け！合
方なしぢや氣取れもしねえ、伊之助さん唯た一人、
へツ惜いもんだ。」
と棄身につくりと首を掉つて、俯くと・・・

「おつと！草場に影法師。いよう、」とシヤヴ
ルの肩をしゃんと替へて、伸出す體で、土手の腹を
差覗く。

「誰方様で、今晚は、はじめてお目にぶらさがる
ね。畜生め、色男。何だ！矢張り土方だ奴さ。情
ねえ、えゝ、影州、何も手前までが依怙地に成つて、
シヤヴルを擔いでくれる事あねえ。藏の鍵でも、ぶ

ら下げねえな、……待てよ、」

で、要もないに、仔細らしく小首を傾け、

「いや、悪く藏の鍵を銜へた處は、繪馬の狐に間違ふだらう。狐に成つちやはじまらねえ……てツた處が、伊之助に成つちや……狐の方ではじまるめえ。此方あ承知だ、稻荷さん、錢おくれ。」

と二ツばかり、ひよいと飛んで、けろりとして、「こら、影州、授つたな、手前の井の處で、チンチロリンと音がする。……チンチロリン、金貨の音だ。何時か親方の持つて居る、三十圓と云ふのを見たつけ、悪くねえぜ、な、」

凝と聞いて、

「あゝ、然う云つても、手前は、此のざら一面に鳴いて居る、蟲の中ぢやお職だぜ。おいらん、お遊びなさいやし。チンチロリン、遣つてやがら、チンチンチロリン、チン、チンチロリン。」

と忘れたやうに。吟んで、……其でも夜風が身に染みたか、肩から素裸の胸を、ト見て、早歩を十歩ばかり。口で云ふのが、葉末に溢れて、露が白く、チロ／＼と玉の轉がる優しい音に、伊之助は突懸けた線路に片足、ぐいと背後を振り向いた。

「あれ、」

今来た土手に影法師……

「おや／＼、忘れて置いて来たかな、恚う、」
と酔つた目をきよると据えて、

「いけ不精な影ぢやねえか、早々と跟いて来ないかい。御本尊は疾くの昔、此方へ来て待つて居ら。べらぼうめ、影法師が居残りをしてくれるほどなら、おらあ附馬に手綱をつけて、並木をハイシイ道中だ。……戀の道幅先のきやれ、チチチン、チンチレチンチン、トチチリシヤン、串戯ぢやねえ、早く来ねえか、やい、あれ自若として居る。」と、シヤヴルの柄を稍縦に……片足擧げるやうにして、伊之助は、ちん／＼もが／＼、と腰のまはりをぐるりと見た。

「どっこいしよ、と、．．．．．おつと來たりな、
附ついて廻まらあ。．．．．．色いろの黒くろい野や郎らうだぜ、矢や張っぱ
り土つちほじりを擔かついでやあがる、御ご大たい儀ぎ々々、．．．
．．．さあ、來きねえ。」

四

影法師は伊之助に搦みついて、ぐるりと廻つて、
イむ足許へ絡つた。其處で出足に成らうとする
と・・・・・

「あれ、又向うへ行きやあがる・・・・よく道
草を食ふ奴だぜ。これ、早々と來ねえかい。はて
な。」と言ふ内、自分で可訝く眞面目に成つて、
凝と見ると、過ぎた土手に、今立停つた、ものゝ四
五間離れた處に、同じ人影がふらりと映る。

と思ふと、自分は、雲助が生れたやうな裸體で居
るのに、先方の影には袖がある。

ヤツと手を揚げると、向うは動かず、其のまゝ胸
から斜掛けに脇の下を覗くやうにすれば、腰の周圍
に尻尾はなくて、草鞋に絡はる裸體の影が、矢張り、
ヤツと手を揚げた。

はて、彼方には袖がある・・・・

「坊主が山から下りて来たかな、いや、法衣の袖がひいらひら・・・」

と他愛もなく呟きながら、さすがに足を踏緊めて、件の草の上の影を辿つて、一目じろりと上へ向けると、矢庭に爪尖がはつと砕けた。

「ござつた、そりや、」

と首を窘めて、突出されたやうに踵を踏出し、

「狐狸、妖怪。」

と聲を呑んで、唇をべろりと一舐。すた／＼と歩行きながら、其の掌で眉毛でも濡らす氣か、ぴたりと睨へ持つて行くのが、額を壓へる形に成る。と偶と留まつて、

「待てよ・・・」

さりとしては思掛けぬ。こんな處に、袖の長い影法師は、坊さんの端唄より他にはあるまいと考へたほど、人の命を、別けて女に祟る土手だけに、今時分其處に立つて居ようとは思はなかつた。

影の主は婦人である。然も薄の穂の上に、すらりとした肩があつて、髪かみの黒いのも、衣紋えもんにかゝつて、薄曇りうすぐもした媚なまめかしい月の色いろも、しろ／＼とある頬ほのあたりも、一目ひとめに見みえて、旗振りはたふの女房にむすめが夢ゆめに粟あはば畠たけを辿たどるのでない事は言いふまでもない。．．．其その風采とりなり。

途端とたんに怪あやしい、と取とつたのは、袖そでのある影かげを視ながめて、端唄はうたを思おもひ出したと同じ取留とりとめのない次第しだいで、考かんがへるまでもない、活いきた婦人をんなに違ちがひなからう。

「場所ばしょが氣障きざいだ。」

あゝ、蟲むしの聲こゑが、其その婦をんなの裳すそのあたりで、露つゆを轉ころがす。．．．玉たまを掉ふる。．．．で、あの人ひとたちちに不思議ふしぎはない。．．．風流ふうりゆうとやら何なにとやら、聞ねから聞ききに出でたかも知しれぬ。が、悪わるくすると、誘おびき出だされた事ことに成ならう。

「時刻じこくも變へんだぞ。」

終汽車は先刻通つた、其は―――漁師まじりに
濱の居酒屋で飲んで居た時、二箇處隧道を通る汽笛
を聞いた。――其からも小一時間、しかし未だ
此のあとへ貨物が通る。

いや、覺悟をして來たかも知れぬ。と思ひ當
る……銀河から霧を抜けて、すつと月の前を、
銀屏風から出て來ないで、急に彼處へ糶出しと云ふ
法はない。

たゞ十歩ばかりの間だつた。……「いや、
違えねえ。」

栗の穂に、ト山鳥を極めて、自分を此方へ遣過ご
したものであらう。恚うして蓑を着て居るではなし、
出來たての案山子どのが達者に歩行き出したとも見
えまいものを、然うでなしに、身を忍ぶ要はない。

「はてな。」
見殺しには出來ぬぞ、役者。

「離して殺して下さんせ。いや一應仔細を聞いた
上で、死なゝきや成らねえと合點したら、手傳つて
殺して上げよう、なんのツて、へゝ、」
と鼻を鳴らして、

「紋切形だ、南無阿彌陀佛と飛込むんだと機かけ
があるんだがな、鐵道の奴あ、これに弱らあ。」

「然うでもねえ、……ある奴だ。悪くお爲
 ごかしにこだはると思はれちや埋らねえし對手が婦
 だけに、……チヨツ些と氣障だが構ふもん
 か！」

つか／＼と引返したが、其でも何うやら氣に成る
 ので、鼻筋などのくつきりと見えるまで、間近には
 寄りあへず。

伊之助は先方に心を許さすやう、シヤヴルの柄に
 両手を掛けて、前のめりに腰を曲げた、故とよぼけ
 た風をして、

「今晚は、
 と一素引く。それ、突伏すか、驅出すか、身を躲
 はして避けるだらう。處を帶腰、ぐい搦、と驅出し
 構への爪尖に、がつくり力の抜けたと言ふは。」

「はい、」

と美しい、鈴蟲の羽が露に濡れたやいな爽かな

返事して、線路を背後に横向に立つた、のが、伊之助の方へ向直つたのであるから。

却つて之に驚いて、二句が一寸續かなかつた。が、入身に一足づいと出て、

「大分更けましたぜ。」と我ながら取つて附けた笑ひやう。

「然うですね。」

と、其でも面を背けもしないで、伊之助の顔を凝と見る。

見られると、優しい眉がほんのりする、清しい瞳も、と思ふと、露が浴つたやうに、伊之助は何爲か悚然とした。

其處で、鬚巻を脱いで、捻取つたのを、一掉つて、

「お一人ですかい、御新姐さん。」

と言つた。何うやら、年紀ごろから髪結びぶり、臍氣ながら然うらしい。

「あゝ、誰も居ませんよ。」
と何となく裏寂しげなものゝ言ぶりであつた。

「へい、お一人切。」

今ので引寄せられるやうに成つて、恚う言ひつゝ、
伊之助は又一步。

「お月見をなさるんで、」

「些と曇りましたわね。」

「へい、」と言つたが、うつかり我知らず空
を仰いだ。あれ／＼、ふら／＼と來た白い雲が、薄
雲の上へ又しても、と憎いまで、やがて二十日前の
月の面に、傍の婦の顔が判然映つたやうに思つて、
ふと氣が付けば、茫乎と其の人に竝んで、土手に立
つて俯向いて居たのである。

唯見れば、同じやうに、隔てなく、其の人も、姿
を竝べてすつと立つ。……思つたより尚ほ近
い處に。

酒氣はすう／＼と氣の減るばかり、霧が吸ひ取つて雲に投げると、銀河の中へ消えて行く。

伊之助は裸體の肩を窄めて、

「え、鈴蟲でも取りにおいでなすつたんですかい。御新姐さん。」

と又云つた、品の可い、圓鬚らしいのを見たのであつた。

見向くと、細面の鼻筋が綺麗に通る。・・・

「まあ、然う云つたやうな事なんですよ。」
と底意ないものいひが、懐かしく耳に響いた。

而して唇も綻びて、微笑みもしたやうに、霧一重
で見て取つて、聊か氣安くも成つたらしい。

伊之助は大分粗雑。

「素人だ、お前さん、・・・屹と其の何だね、あれさ、其の様子ぢや、南瓜は些と扱ひ憎いや。其處で何だね、眞桑か茄子をくり抜いて、ほら竹矢來

を結ゆふ、竹矢たけやらい來きも凄すさまじいけれども・・・ぢや
市松いちまつの格子戸かっしどですかい。で、以もつて、砂糖さたうを調てう合がふし
て、此こ奴いつを何なんでせう、其その草場くさつばへ、ト轉ころがして置おい
て待まつていらつしやるんぢやありませんかね。

おツつけ何なんだね、雪洞ほんぼりで褌つまを取とつて、其その中なかへ入はい
つてる、チンチロリンを、ちよろりとしてやらうと
云いふのがお約束やくそくだ、はゝゝゝ、
と其それでも内端うちはに笑わらつた。

其處で伊之助は、叩頭をするやうに一人で頷き、
 「嘘ですよ、から、嘘。誰にお習ひなすつたか知
 らないけれど、然う旨く行くもんかね。そんな事で
 鈴蟲が占められるくらゐなら、いろはを書いて檐前
 へぶら下げときや鸚鵡が飛込みますぜ。

今に御覽なさい、其の砂糖を振掛けた處にや、油
 蟲が反身に成つて居やがるか、上々の首尾に行つた
 處で、閻魔蟋蟀が反齒を露出してござるが落だね。

夜分は不可ません、えゝ、

と草鞋の尖で露を散らして、俯向いて土手を見な
 がら、

「晝間が可いや、ありや、暗くならねえ内に、手
 捉えが祕傳でさ。其に、．．．．．こんな處で、夜
 分遅くなつてからなんぞ、お止しなせえ。

此の土手や悪い土手でね、よくお前さん方にお怪
 我があるんで、女が何だ、一人で來なさる處ぢやあ
 りませんぜ。」

と柄にも似合はず眞面目に言ふ。伊之助は此だけ心付けるために引返して来た次第で、對手が何をしに今時分線路を御律ふのか、仔細は知らず……言を掛けるに取附端が無いから、假に鈴蟲を取りに出たものにしたが、其の實は、未だ何うやら死に、来た人だと思つて居る。

自から聲に深切が籠つて、

「ね、眞個だ、一人でおいでなさる處ぢやねえ。」

「難有う、」

と凝と立つたまゝ身動きもしないで言つたが、然も嬉しさうに聞えたので。

伊之助は尚ほ身に染みた。わけもなく一寸天窓を搔いて、

「へい、何、然う禮を言つちや不可ませんよ。」

「……資本なしで、お爲だ。餘計な事を言ふんだからね、えゝ、氣障な野郎だ、大きにお世話と言ひなすつたつて其までだ。……然う言ふ内にも更けますから、お前さんお歸んなさいまし。」

と薄が揺れて、何か、頭のもものが照々した。・
・
美しい人は、向直つて、

「お前さんは、これから、」

「私かね、私あ何、何うしたつて可いんですがね、
穴があるから、潜らうてんで。え、此の村の切通
し工事の土ほじりに来るんです。向うにソレ、霧の
空に浮いてるね。あの妙音山を一つ越すと、宿場が
あります、一ツ穴の奴等組合で、皆潜つてるんで、
其處へ歸るんです。」

お寂しか送りますか。方角は構ひませんや。何處
だつて平氣です。夜はよし、月はよし、お前さん、
たかノ、歩いたつて日本の内だね、大海へ突當
つて船がなけりや其處で寝るんで。と大きに氣
競ふ。

「否、而して、土手をづつと行らつしやるか。」
と言つて、指さしをしたが、袖のしなやかなのに
も似ない、鐵槌のやうなものを持つて居る。

伊之助は其で壓される心持で、我にもあらず、後へ退つて、

「田樂ざしで近路ですから、」 「其では、何、

あの男の方なら構はないの。」

「え、構はねえのつて、何がですえ。」

「夜中に此處を通つても、」

不思議に一言、言ひ知らず意味ありげで、伊之助は又悚然とした。

が、思返して、

「人によりまさ、對手が私だ、やい、と大手を擴げて立ちや、汽車だつて留まるんですぜ。

死神なんぞ、お前さん。」

「死神つてどんなもの。」

手にしたものを、軽く胸へ。美しい人は屹と見向く。

「どんなものツて、お前さん。」
 と伊之助は苦笑ひ、

「こんなものだツて、お前さん、何うも容子や身振りで、お目に掛けるツて譯にや行かねえやね。何でも恚う、不思議と同じ處で人が死ぬツてものは、死神て奴が居て誘ふんだつてね、死ぬ氣が微塵もなくつても、其處へ出會すと、ぶら／＼として忽ちぎやふん。ほら、紙屑籠から出た亡念と云ふ形で、おいで／＼を極めてるのが、繪になんぞ描いてあるぢやありませんか。恐怖えね。恚う云つても、ぞく／＼すら。お前さん、呑氣な事をおつしやるけれど、こんな面だなんて、私が悪くベソを搔いて、氣取つてごも御覽なさい。すぐにキヤアですぜ、おほ、可厭な事だ、七里潔排。」

と先方の問方が問方なれば、伊之助は賺すやうに威して言ふ。

「嘘ですよ、そんな事。」
 と寂しいが莞爾する、唇が霧に揺れて、

「私、其よりか、お前さんが、今しがた彼處で可訝な風をして、影と一緒に草に搦んで、一寸一寸刎ねておいでだったのが可恐かつた。髑髏を頭へ載せて、お星様を拜んで居るやうな恰好なんですもの。．．．狐かと思つたんです。而うしたらお前さんだつたのね、．．．近頃は又此方へ仕事に來ておいでなの。」

「えゝ、」

と稀有な顔をして、まじ／＼と瞬きしながら、

「．．．近頃は又此方？．．．へい、私は何でさ、他國へ勞働に行つてたんで、一年振だね、然も今日つから舞戻つて手傳に來たんですが、．．．はてな、お前さん、何うして其を．．．」

「知つて居ますとも、相ひかはらず元氣な方ね。」

「ト待つておくんさいよ。えゝ、と、．．．分らねえ。尤も何だ、此方人等式が、貴女がたに知己のある譯はありませんが、何處かで見た事がある

か知らん。はてな、もし、不躰だけれど、前さん向うを向いて試しておくんなさいな。」

「何故、何うするの。」

「一寸、何うぞ。」と眞面目で言ふ。

「然う、」

と、言ひつゝ、袂を斜めに……身を動かす時莞爾して、

「悪戯をしては不可せんよ。」と、すらりと後姿になる。

「飛んでもねえ、御串戯おつしやらあ。」と早口に言つて、口を曲めて、慌しく睫毛を濡らして、

「何ね、胴忘れをして分らねえ人でも、後姿は決して忘れつこのねえもんだと言ひますからね。」と言ひ／＼、伊之助は右瞻左瞻る。

四邊が寂寞とした所爲か、海も遠く成つた。巖走

る波とん／＼と、小川の布を、打つや砧。三ツ四ツ
五ツ雁金の里。峰の松影がさつと動くと、其の人の
脇がひらりと靡く。薄の絲の佛立つて、羅を透く背
筋の月影。帯に散つた白露は、其のまゝ蒼く咲きさ
うである。扱帯も幽な弱腰ながら、結目もきりゝと
して、寝衣浴衣を其のまゝに閨の戸を迷つて出た、
夢のやうな扮装ではない。

「あれ、」

「やあ！大丈夫だ、尻尾はねえ。」

と引込めた手を宙に掉つて、伊之助は甲走つた。

「まあ。」

「あゝ、冷汗が流れらあ。」

「ほゝほゝ」

「とてもものに、顔を、見せておくんない。何
矢張り、實は其が一番確だね。だけれども、何だか
ね、餘り美しくつておいでなさるもんだから、眩く
つて不可えや。……何故か、恚う變に目が霞
んで見えねえんですぜ。まあ、何うか、此方を向い

ておくんない。」

「はい。」

「おつと！」と伊之助は片手を伸ばして、拜む

やうな形をした。

「其だつて、何ですぜ、正的に向いて、凝と私の面を見ちや不可ませんぜ。些と其の横つちよにね、……而して此方を見ねえで、私にばかり拜まして、おくんない。でねえとね、變に目玉ばかりぱちくりして、しやつ額がむず痒く成りますから、可うがすかい。」

「恚うですか。」
 と横向きに莞爾する、と霧を拂つて判然した。後毛も數へつべく、はら／＼と頬にかゝつて襟足も月に白い。素足の雪の爪先から、ベツかこをする形で、伊之助はぐいと見上げて、

「やあ、」
 と身を退き、眞直に突立つて、
 「嬢さんだ、二階家のお嬢さんだ、お前さん。」
 と大息を吐いて言ふ。

尤も、見知つては居たが、別に言葉を交はしたほ

どの事はない。．．．此の村も海水浴で、夏向は繁昌するから、藪疊や一本橋を離れた邊に、一側竝べ一條ながら軒を揃へた町家がある。垣鄰りは藁家だつたり裏は直ちに田畠だけれども。．．．中に一軒、すら／＼と空を蔽うた槻の森、日盛りにも冷いばかり、沖の波を梢に招いて、枝を白く葉を翠に、涼しさは瀧の如く、晝も暗い中に翻る、其の下蔭を、北向の縁側にした二階の欄干に、袖を置いたり、胸を載せたり、濡手拭を引掛けたり、雪の腕を、衝と板廂の外へ伸ばすと、團扇の先で、山の端出で、梢を渡り、葉越しに移る夕月を、枚ながら引き寄せなどして、羽衣蒼く色白く、雲井の富士と對向ひに、里に日立つて住まつたのが、こゝに見える女性なのである。

凡そ三十坪ばかり、村の年より齡久しく、鬱葱と生茂つた、其の森の持主が、望み手のあるに任せて、樹を拓いて、宅地にして、貸渡す事に成つた。

伊之助は木挽大工、穴穿石伐、何でも以つて來いの労働者で、はじめ其の森を伐倒す時分から、地な

らし、柱立、棟上の濟む頃まで、去年春の末から夏へ掛けて、一三月ばかり手間取りに、妙音山の山越しに毎日親方の部屋から通つた。汽車は一帳場に過ぎない近在。

で、直き二階下で働くので、姿も顔も毎日のやうに見たり、其の人に使はれる女中には、行違ひに串戲の一つも言つた。

其に、晝休みに引揚げる、居まはりの百姓家、柿の木の下縁臺なんぞで、多人數が仇口まじり、よく其の噂が出たのであるから、其の人は、病める夫に附添つて、東京からの出養生。夫婦と云ふが、兩方とも初々しい、一聞けば、口約束ぐらゐで、まだ三々九度も濟まぬのが、思ひ思はれたなかであらう。すゝぎ洗ひも人手には掛けないくらゐ、しみ／＼介抱が届くと言ふ。……真の時分は、恚うした圓鬚の事はなく、葛引白き銀杏返、平打の銀簪で、婀娜な島田の娘風。偶然面窶れがして結び髪、いや、女房ぶりを見せる、と思へば、些と容體が快くないので、近頃夜通しの看病と聞いた折さへ、

うら若い人であつたが。

丸一年とは経たぬのに、髪かみのふりもある所せ爲ゐか、
二十の上うへを二ツ三ツ星ほし、夕顔ゆふがほがぱつと開ひらいたやうに、
蒼つほみが解とけた月夜つきよの風采とりなり、思おもひ掛がけないばかりでなく、
一ツはために見違みちがへたのであらう。

其それと見みて尚なほ目めを二みつた。

「分わかつて、」

「え、分わからなくつて、．．．串戲じやうだんぢやねえ、
今いまの少わかさで、べらぼうな、目めが何どうかして居ゐまし
たかね、薩張さつばり見外みそれツ了ちまひました。」と拳こぶしの腹はら
で、引擦ひっこする。

九

薄が靡くと向直る、黒髪の色鮮麗に、

「其では可うござんすね。」

「えゝ？」

「分りましたわね。．．．最う一度、むかうを向きませうかね。」

「其の事で。へゝゝ、そりやね、此方を向かないで居ておくんなさりや、夜の明けるまでゞも、私あ恚うやつて拜んでるがね。」

「最う澤山よ。」と曇つた空も晴がましさうに、半ば片袖、片頬を蔽ふ。

更めてお辭儀をして、

「こりや御機嫌ようおいでなさいます。．．．矢張、お住居は彼家なんで。」

「はい、同じ處に．．．」と、何故か些と沈んだ聲。

伊之助は何の氣もなく、

「あの森の跡へ建ちましたのは、商人家だつて言ひますから、お騒がしうございませう。町は賑かになつて可うがすが、貴女方にや不可ませんや。」

「否、」

とばかり、少々附穂がなかつたので、伊之助は出直して、

「何は、……あの、」……と此處で、病氣だつた其の主人を見舞はうとしたが、妙に言ひそびれて一寸吃つて、

「えゝと……あの、何は、それ、御鼻屑の繡眼鳥どのは。」

と一ツ奉つて、と笑つた。

「相變らず、きり／＼ツぱいぱい、なんて囀つて居りますかね。お前さん、私たちが那の森を伐ります時分、眞蒼な二階の縁へ、よく出してお置きなすつた、ぱい、ぱい……」

伊之助は唇を鳴らしながら、

「……なんて、可愛らしい聲をして、飛んだ愛嬌ものでしたぜ、ありや。……其の癖氣が強いつたら。そら、あの、がた馬車が喇叭を鳴らして、砂煙を立つて、ぐわつと來ると、負けないできり／＼つて遣出すんだもの、負けない氣たら。……何時なんざ、胸突の木遣りに競つて、見上げるやうな高い處から、柱の上へ、きり／＼つて押被せるんだ。よく聲が透りましたぜ。此方が休むと、奴さん黙るから、や、草臥れたな、と然う思つて、恚う密と聞いていると、獨言のやいうに、クチ／＼と遣つてるのが、小雀山雀五十雀、何でも持つて來いで、ケーキヨ／＼なんのつて驚まで眞似てたぢやありませんか。ありや、山で巢に居る時、恚う、ふよ／＼とした産毛の中で、黄色い嘴をコト／＼と遣つて、見えるか、見えないか分らねえぐらゐな目で、親鳥が餌を運んで來るのを待つてる内に、隙に飽かして覺えたんですぜ。……可愛つたら、」

と莞爾々々して云ふ。

「あゝ、よく馴れて居ましたよ。而して椿の花が大好きでした。花が好きつて、あの、中の蕊を食べ

るんです。．．．．最う遁げないから、炬燵の上へ出して遊ばせると、眞赤な椿をくる／＼廻はして、夜具の綴糸に、危かしさうに、小さな爪を縫つて、やがて身體の半分くらゐ花片を被つてさ、嘴を粉だらけ、眞黄色。」

と爪探る、薄の穂がすら／＼と、白魚のやうな指に透いて、黄色にすつくり、女郎花が霧を拂つて咲きさうな氣勢に見える。中空の月の面を、雲が白く分れたので、露に姿の照り葉ゆる、其の人は尚ほ美しい。

「然う、．．．．お前さん、知つて居る

の．．．．」
と瞳も優しく、嬉しさうに打頷く。

「知つてますたツて、村中評判の繡眼鳥だもの。」

「まあ、そんなに好いのぢやありませんと

さ。．．．．唯あの、可愛いばかりなのよ。」

「ですからさ、貴女が可愛がんなさるツて、其の評判で、知つてますとも。一度あの繡眼鳥が遁げま

したね。其それだつて見て居ゐましたぜ。ほら、ふい、と
飛とんで、背せ戸との茶ちやの木き中なかへ潜もくつたもんだ。お前めさ
ん、朝あさツぱら、寝ね衣まきの装なりで、跣は足だしで追お掛つけて出でなす
つた。．．．．貴あ女な方がだア、井い戸とへ身み投なげでもする
んでなくて、」

と、じろりと見みて、

「あんな風ふう采さいをなさるもんか、串じやう戲たんぢやねえ。」

「井戸掘りの手傳ひをするとつて、裸體で腕組みをしながら、のつそり突立つて居ましたつけね、お前さん、お馴染だ。裏の百姓家の兄が、其でも奇特さ、蠅取藪を取つて来て、竹の尖へのら／＼と塗り付けるだ、盜賊を見て繩を緋ふツて事はあるが、何ておめでゝえんだかね。

其奴を又羽ばたきもしねえで、きよとんとして茶の樹の中で見て居たんだから、小鳥の方も初手から遁げる氣ぢやねえんでさ。で、なくツて・・・あんな兄が腰つきで、鳥刺が出来ますかい、てんで棕鳥を追廻はすか、警婦がコラサの踊だね。私に遣らせりやな、と然う思つて、チヨツ、舌打をしたけれど、お前さんが傍に立つて、はら／＼して居なさるから、遠慮をして、其でもね、氣を揉んで居ましたぜ。

處を、さした。いや見事にさした。が鱧突きに遣らかしたから、堪らねえ。それ、ぴつたり藪に包ま

つて、繡眼鳥殿は、ト見ると、爺様が杖の取手の鳩さ。

其奴を何うです．．．．左義長の餅のやうに、竹の尖から擦ぎつて取つた。お前さんの手に乗つた時は、目も當られねえ。隊長、飴の鳥と云ふ形でべつたりと膨れたね．．．．お前さん、背戸の沓脱へがつくり腰を掛けて、凝と見て居なすつたつけ．．．．目のふちがぱつと薄紅く成つたと思ふと、袖を啜へて泣きなすつた、私あね、生垣から覗いて居ました。」

「可厭な人ね。」

「え、へん、と頭を搔き、」

「あれから四五日鳴かなかつたね。半分伐つて明くなつた朝涼の森の中へ、きりきりツぱい、と聞えた時は、．．．．」

『おめでたう。』

「いや、おめでたう。」

「お互さまにな。」

なんのツて、各々に目ませを遣つた。皆が案じて居ましたんでね、へい。

だが、可愛いもんです。「と、伊之助は息を吐いた。」

「眞個に可愛いものね。鵜が附いて、あがきが出來ないものですから、籠の中でも飛べないの。隅の方に小さく成つて、もう、かゝり切りで、嘴で羽を撫でゝは扱いて取るのよ。其の度に、羽が抜けるんですもの。……餌も食べ得ないで、綺麗にならして置く猪口の萌葱色なのに、ぼつちり嘴のあとが三つぐらあついたばかりの時は、心細うござんした。」

と又しんみりして、
「……然うですか、皆で案じて下すつたの……嬉しい事。」

と後が途切れる。……様子が依然として何うも氣懸。

「これからが又、旬ですぜ。貴女お好きだから、些と繻を掛けてお取んなさいまし。．．．此處等ぢや二羽や三羽、何うだつて構やしません。私もね、今度は一月ぐれえ続いて仕事に来ますからね、一息朝疾く出掛けて来て、しら／＼あけに山へ行つて、一度に十羽そこら、繻眼鳥にや限らねえ、鴨も鶯も入交ぜに捉めえて上げませう。

其でなくツたつて、其こそ何だ、きざ柿の赤いのを、籠へ入れて釣つときなさりや、ひとりでに飛込んでコツ／＼遣りまさ。處を絲を引張りや、中で忽ち黄色い羽をばさ／＼もんだ。．．．兄のさいてくりヨより仕事が綺麗だ。誰が教へたか知らねえけれど、眞桑の穴へ鈴蟲より、其の方が、まだ、どんなに確かだか知れませんぜ。

其もね、お前さん欲いんなら、明日何だ、晝休に、ちよいと取捉えて上げますが。羽の痛まねえ、足の擦げねえやうに、あんばいよくね、一百ぐれえお目の前、私が鼻油でちよつぐらもんだ。

え、夜露が酷いんですぜ。お前さんのやうな身体
ぢや身に沁まあ、大毒だ。・・・最うお歸んな
さいまし、めつきり冷え。」
と一つ腕をぴたりと叩いて、中空の雲を見た。其
の額さへ蒼いやう。

「あれ、犬が鳴かあ、送りませうかね。」

「ありがたう、否、鈴蟲を取りに來たのぢやありません。」

と、憊る月夜の獨あるきを、人の怪しむとも思はぬ状に、何の憚る處もなさうに言つたが、併し其の人は悄れて見えた。

「へい、ぢや、まあ何うなさるんだか分りませんが、貴女方が何をなさるたつて、夜分に限つた事ありませんまい。御覽なさい、人ツ子一人、案山子だつて煙のやうで、蟲の聲と言つたら、まるで蟻が鳴いてるやうだね、鳴子の音も夜嵐でさ。餘程更けました。」

と道具の柄越に捻向いて、――これから越す
 ー 妙音山の樹立を仰ぐ。 . . . 線路の果
 の霧の隈、月に裏透く淺緑も、やがてもみぢの色を
 籠めて、薄紫にほの暗い。 . . . 峰も雲の下臥
 に、谷もあらはな草山ながら、美しき神おはします。
 東海一座の靈地とかや。

去にし年、此の里の野川溢れて、村々水に浸りし
時、稲葉も蘆も濁れる海に、其の峰孤つ姿を抽いて、
優しき蓑の篠薄、色鳥に峙を貸して、羽衣靡くと見
えしより、妙音山、又の名を、姫島と稱ふる由。

白銀の琴空にあり、銀河の絲に琴柱を放つて、天
女の膝を雁渡る

伊之助は仰向く鼻に嚏して、

「は、薄ら寒くなりやあがつた。もし、眞個にお
歸んなさいまし、お前さんがお留守だと、鼠が繡眼
鳥を引きませぬ。」

此が太く身に染みたやうであつた。其の人、胸に
片袖當てゝ、

「最う、私、家へ歸つても、あの、繡眼鳥は居な
いんです。」

「遁げましたかい。」

「否、」

「ヤ、鼠に、ぢや、殺られたんで。」

「否、此の春、主人がなくなつた時、供養だと思つたから、姫島へ行つて放しました。最うね、よく馴れて居ましたからね、手で格子を叩いても、袂で籠を嚇しても、飛ばなくつて、其も思ひに成りましたよ。」

「其奴あ、思切つた事をなさいましたね。あんなに可愛がつておいでなすつたのを。よく、お前さん。しかし御功德だ。……へい、……何ですかい。ぢや旦那アおなくなつたんで。へい、そりや、何うも、何うも何だね、何てつて可いか、へい、弱つたね。……此の、嬰兒を、ばあ、なんてあやすのと、死んだ人のくやみを言ふのが、からツペたで、え、御愁傷だ、御愁傷だ。」
と成程うつらぬ。

「いや、解りました、はあ、其處でお前さん、恚う遣つて、夜中も構はねえ、ふら／＼と出て、お墓詣りだ。」

「嘘です……然うでもないのですよ。」

「解らねえね、何うも分らねえ、眞個に今時分何を
して居なさるんで。え、お嬢さん、乗
つかゝつた船だ、私も氣に成ら。聞かして下さい
な。」

と無邪氣に言ふ。

「さあ、何いうしませうか。」

「構やしません。何だつて、お前さん、内證の事
なら内證でさ、喋舌つて悪い事を言ふもんか！
・ ・ ・ 大丈夫だ、お聞かせなさい。」

「でも、些とよくない事だもの。」

「よくねえ？」

と競ひ懸つて、

「心配な事かね、・ ・ ・ 其とも、よくねえ事
つて？何か遣らかすのかね。」

「あゝ、する事が、」

と頷きながら、

「少し困るわね。」

「困らねえ、些とも困らねえ。何だつて驚かねえ、お前さんが短気な事でもするんなら知らねえが、其の他の事で、何を、私が困るものか。ねえ、早い話が、不躰だけれど、お前さん、盗賊をするんなら乾分に成ら。」

「其の盗賊よ。」

と言つて、清しい目で、一寸見て、而して澄まして後れ毛を搔いたのである。

「やい、助けてくれ、殺すのか、こりや己を何うする氣だ。」

と山飛伊之助、土手の草へ尻餅を \equiv と支いて、脛を向うへ、身體を投棄に出した形で喚く。・・・・

「えゝ！ 恚う、幾ら安つぽい人間だつて生きてらい、米食ふ蟲だぜ。然う粗雜に取扱はれて堪るもんか。串戯ぢやねえ。・・・何だ、何だ、汝達は、狐か、狸か、正體を顯はせろ。」

目を剥け、やい、牙を出せ。眞赤な舌をぺろりと遣れ、畜生め。天窓から鹽だらう、合點だ、來やあがれ！

箒から撮んで振懸けるにや及ばねえ、鹽風は海から吹くぜ、料理は出來てら、來い、さあ取懸れ、古狸。

化けてもな、これ、脆弱な婦ぢや暖簾と相撲だ、

張合はねえ、捻伏せたつて何うなかものか。可いもの
に化直した！ 手前の方ぢや威かす氣でもな、出直したのが運の盡よ。

状は何だ、其の状は、がら／＼の軍人形、凧繪の猪之熊、覺悟をしる。

と未だ立てぬ身を二いて、兩脚をばた／＼蹴る。・・・月の影を取損ねて、樹から落ちた猿のやうな、腰が抜けても此の口なり。

唯六尺ばかり隔る處に、月の光を眞向に、劍の如き牙かと見えて、鍬形高き星兜。腦上に俄然と頂き、緘は何とも白露の薄を亂した搖ぎの絲。草摺長き大鎧。射向けの袖を小夜嵐に颯々と翻へして、狭霧を籠めた立姿。・・・眞晝の如き月明りに、漆の如き影を踏み、霜を刻んで、ぬつくと居る。

其の肩はづれに切尖高く、妙音山を斜に懸けて、銀河を透す大薙刀。蛭巻押取つて、石突々いたが、兜の廂を俯向けに、眼の光は隠れながら、梟の如き

洞間聲、

「やあ！」
と掛けたが、食はうと言はず

「これ、騒がつしやるな。静にさつしやい、何も
變つたものではないが。」と吹返を揺る重い音調。

伊之助は、草を掴んで、波の如く肩を敵らせ、
「畜生、其、其の状が變らねえでよ。濱へ出る吹
矢にだつて、今時、そんな奴があるものかい。汝！

「いやさ、怯えられなと言ふ事ぢや、決して可恐
いものではない。」

「當前よ、誰が汝、怯えるものか、何が可恐え。
べらぼうめ、相手にするにな、其、其の化状が氣に
入つたと言つたばかりよ。さあ、來い、辨慶、牛若
だぞ此方あ、」
と意氣張る下から、

「わつ、」と叫んで、腰を摺らして、手を空ざ
まの影が震へる。

「待て、待て、え、危え畜生だ、刀物は
止せやい、觸ると切れらあな、べらぼうめ。

此方あ棒切も持たねえぜ。幾ら私だつて素手ぢや
不可ねえやな、おまけに裸だ、堪るもんかい。化物
だつてな、恚う些とは立引氣を出すもんだ。

相撲で来い、さあ、取組め一番、咽喉笛を要心し
る、獸め、日本の犬あ強いんだぜ。」

「いや、此を振廻すではない。安心をさせま
すために、昔なら兩刀を投出す處、先づ早や薙刀を
片寄せまするが、待ちなさい。」

と廂を上げて、鍛を揺れば一嵐、から／＼からと
鳴子が響く。

「さても月かな、影もない。取隠さう立樹も見え
ぬ。

些と目觸りか知らぬが、石突を草に刺して、
・・・は、あ、何と五月幟の寸法ぢや。

いや、地に置いても濟みますが、ありやう此は姫様の御道具ぢや、處で錆させると恐多い。」

と銚を離れた鎧武者、直垂をさつくと寄る。と蟲の聲に沁入るばかり、玲瓏たる夜半の月に、樟脳の薫が芬と立つて、

「私は此の姫島のな、辨財天堂の坊主ですて。」

「はあ、あの嬢さまが。……ふう、其處で、
 ー其の盜賊ぢや、と言はれましたか。いや、
 それでもな、申される事は元氣ぢやの。」
 と土手さがりに臍當をぶくと伸ばして、線路に腰
 を落した武者は、成程な……。兜を脱げば和尚
 天窓で、四十ばかりの柔和な人物。

兜は、と見れば、克明に、手拭を敷いて据ゑて、
 露に星を交へたが、薄を貫く鍬形は、水底の巖に折
 曲る、残月の光の如く、草の根も明るくて、蟲の影
 も照らさるゝが、鍛の下でも、昔から、其の鳴く聲
 は途絶えはせぬ。

伊之助は身に沁む月に、搔探つた半纏を、手も通
 さぬが、肩に當てゝ、漸と一服吹かした處、白い煙
 は颯と消えて、煙管に葎の灯が見える。

「ーねえ、處で、私あ手先に成つて働かう
 と然う言つたあ。」

和尚わしやうさんの前まへですがね、私わつしあ随分ずゐぶんとソレ見みなさる通りとほ、下さがつた、がらくたな人間にんげんだけれど、眞個ほんこの事ことた、盜賊根性どろぼうこんじやうは些ちつともねえ。それだけは請合うけあひでさ。

處ところを、ふらりと手下てしたに成ならうと言いつたもんだ。其その癖串戯くせじやつたんは思おもはねえ。．．．つい、まあ、先刻さつきの事ことだけれど、あの人ひとの風ふうで、和尚わしやうさん、何なに、お前まえ、盜的どろを企くはてるもんですか。積つもつても知しれた事ことを！
何どう言いふもんだか、嘘うそツ八ぱちとは思おもはなかつたんで
すぜ。だのに、手傳てつたひをしようと言いつたね。

『まあね、唐突だしぬげに恚いかう言いつた處ところで、何なんだ、お嬢ぢやうさん、此これまでおともだち交際つきあひもしねえもんだから、他の事こととは違ちがひまさ、うつかり眞個ほんこにやなさるめえ。
お待まちなせえ、さあ、此この土手どてへ突臥つゝぶすからね、可ようがすかい。．．．私わつしの此このシヤヴルで土性骨どしやうぼねでも背せなかでも、びし／＼打撲ぶんなぐつてお試ためしなさい、裸はだかで居ゐら。皮かは一重へだ、日ひに焼やいて鍛きたへたつて對手あひては鐵てつだね、やはな手てだつて、皮かはも破やぶれりや血ちも出でらあ。處ところを一番ばん、お痛いて、とも言いはねえで、我慢がまんして見みせるが證據しやうこだ。』

ツて、然う言つてね、突然腹這ひに成つたもんだ。……露が充満でせう、腹の底あヒヤリとしたね、
と首を掉つて、

「ね、此奴が長階子の上と来て、下の方に蜘蛛の巣搦みで、鳶口を打掛けてると喝采だけれど、地面へ其の體でのたくつたんだ。白痴が鯨に慌てやしまいし、威勢が悪いやね、和尚さん。お剩に線路の上でせう。東西、鐵道往生だ。死神に執附かれたやうなもんでさ。」

あゝ死神でもな、あんな別嬪なら怨はねえね。私も其の氣で、シヤヴルでお打ちなさいと言つたんだ。」

和尚は直垂に手を支いて、實體に打傾き

「誓ぢやの……武士ならば金丁と言ふ處を、身を棄てゝ懸らしやつたか。其に越した眞心の見せやうはない。……又先方では見やうもあるまい。」

はて、書物に嘘は書いてない。聞きなさい、よく肖た話ぢや。

昔、其の誰か知らず……先づ小侍らしい髯の赤い男が一人、黄昏時に、都方の裏町を通行すると、薄暮合の蔀の中から、白く細やかな手を出して、鼠啼をして招くものあり。これにうか／＼と呼込まれた。呼入れた主と言ふのが、清氣なる女の、形愛嬌づきたるが年二十あまりとしてある、似て居るの。

處で、其夜は泊つたわ。

翌日も、歸るを忘れる。……と朝から馳走ぢや。……旨いものは食べる、酒はあり、又明の日も逗留ぢや。處が其の、初の晩から、食物の用意などは、其の婦がするではない。暮ると戸を叩くものがあるで、件の髯赤男が働きぶりに門を明ければ、侍まじりに女房下女など、四五人どや／＼と入つて、其のものがどもが運んで来たぢや。當節なれば仕出し料理。」

十四

「此處等の停車場前の蕎麥屋で拵へる、蝦をかな
じんで鰯で間に合はせる天麩羅などゝは選が違
ふ・・・都の庖丁、美味だてな。」

と和尚は舌鼓を一打つて、引合せから拔出した煙
管を取つて、丁と伊之助と吸合はせた。

「それ、食ひます。婦も三年馴染んだやうに、男
の前も憚らずものまゐるのが打解けて尚ほ愛々し
い。・・・食事畢ると、雑と其の、古い時分ぢ
や、折敷、三方などを取片付けて、皆がさつさと出
て行く。後に残るは、二人ばかり、は凄いての。」

しかし、誰が逃へた、と言ふでもない、男の分ま
で、丁と見計らつて持込んだも怪しければ、翌日も
又時を定めず、種々雑多なものゝ入替り立替りする
も可訝いが、夜に成ると婦ばかりで差向ひが嬉しさ
に、とぼんとして三日四日、龍宮の氣で居たと言ふ
が、些と不心得でも無理はないの。白い珊瑚の枕な
れば、

「いや、其奴ア何うも歸り憎いね、私だつて居續
けだ、で、何うしましたい。」
と草鞋の尖で煙管を拂く。

「さて二十日ばかり經つと、婦が言ふぢや。」
「生肝を呉れる……………」

「否、先づ……………些と頼みがあるが肯いてく
れぢや。活すも殺すも御心のまゝと言ふと、の、其
の男を奥まつた方へ、唯一人連れ込んで、荒縄でく
る／＼巻。」

伊之助は頸を窺めて、
「そりやこそ、おいでなすつたわ。」

「で、拷問柱に結び付けの、背を露出、突臥させ
て、別嬪はと言ふと、烏帽子を被り緋の袴を穿いて、
其處で笞を以て男の土性を八十度、」

「八十度。」
と鸚鵡返。

「確に八十度打つてけりで、心地は如何に？ と聞く。・・・何の其の、と潔く答へると、おゝ、嬉し、と背を擦つて、酢を吞ませたと云ふ。」

「煮酢だね。」

「うんやさ、の、昔は其が薬と見えた、・・・が、男、煩うたは是非に及ばぬ。處で、歡待は以前に十倍。やがて答のあとの癒えた處で、又候前の處へ引出して、疵のあとを打つたれば、立處に血走り肉亂れけるとある。・・・可恐や、構はず又八十度。・・・心地は如何に、と問ふ。・・・何の其の、と呻吟いて言ふと、仰向けて今度は腹ぢや。漸と其を堪へる、とさあ、あとは眞綿よ。・・・。・・。白い手で撫でつ擦つゝ、よく其の疵が治つた處で、黒い素抱を着せ、脛巾、藁沓を穿かせ、弓胡弓を持たせたわ。・・・大名に取立てた譯ではない。これで一人前の手下の盜賊。――

何と、私も餘りの事と思つたが、主が現に、あの、二階家の嬢さんに、シヤヴルで其の背を打たせよう

とした、と言ふで、我折れ手を拍つたです。

あゝ、恐しいは美女の力ぢや。．．．成程、
堪へ兼ねまいかの。」
と、ぐつたりと頭を下げる。

「へゝえ、そんな本がありますかね。」

「あります。御堂の方丈に先住から傳はりらしい、
蟲ばんだ端本ぢやがの、．．．何とか言つた
よ、．．．それ／＼、宇治大納言の物語
さ．．．」

「成程、甘味で、茶話だ。」

と伊之助警拔なことを言ふ。

和尚は、口を開いて、やゝあつて苦笑した。

「しかし、眞個に打たせ申して、盟はるゝ氣であ
つたかい。」

「當前さ。早い話が、惚れた婦に捻らせて御覽じ
ろ、痛くはねえやね、大が小だ。シヤヴルで以つて、

ぴしやり！ その八十度請合ひだ。だが何だね、う
まく遣つたね、其の野郎は。一日だつて半日だつて、
お前さん、
と變な顔色。

「畜類め、私あ一向榮えねえや。」

和尚慌しく手を擧げて、壓へるやうに、

「これノ滅多な事は言はぬもの。……其
のかはり、貴女は盜賊でも何でもない。が、よく、
主の眞心は通じたぢやらうの。」

「頬邊の處へ、堪らねえ良い匂がして、ヒヤリと
袖が觸つて、お前さん。」

と伊之助は四邊を見ながら、瞳を露に輝かして、
「のめつてる私の此の、手を取つて起しなすつ
た。」

「成程、其處で、其の花の事を言はれたぢやな。」
 と和尚は聞く耳に蟲も忘れる。――其の花の
 事と云ふのは。――

伊之助は聲も發奮んで、

「然うですよ、え、嬢さんが、盜賊と言ふのは
 嘘で、實は花を探りに出たんだ、と言ひなさる。」

分つた、ぢや、其のお亡なんなすつた旦那の墓か、
 お佛壇へでも供へるんでせう、と合點むとね。何も
 それなら恚うやつて、夜中に出て來る事はない。

「あ、霧が晴れた、月が明るい、曇つて居れば
 可いものを。」と恚うだ。

「絲瓜の水は月の良い時流れるツて言ひます

ね。……お前さんのお探んなさうといふ花
 は、暗い晩が可いんですかい。」

ツて私あ聞いた。

然うすると、私か顔を恚う視ながら、いや、矢張

り其の盜賊か知ら、野山に自然に生えて居るのぢや
ない。――と云つて其の野も山も持主があらう
けれど、其は誰も大目に見る。――私が欲いの
持主が丁とある、……。とおいでなすつたから、
占めたわ、面白い。峰の松の天邊に搦んだ蔦を、月
から引外せと言ひなすつたつて、おい来たゞが、そ
んな事は輕業だ。人の庭にある奴なら、折ペしよる
に張合があつて可い。薪ほど引背負つて、一番シヤ
ヴルを杖にお供で歸らあ。一體何處にあるんですツ
て、聞くと、さあ、此處だ、和尚さん。

「おほ、」

「線路の土手に添つて、小川が、恚うして海の方
へ流れて居らあね、……。ぢよろ／＼水だ
が、……。可訝しく此奴が、茫として大川のや
うに見えた、と言ふのは、其の時のお嬢さんの風采
だ。恚う遙々と平一面に雲も霧も隔つたやうに、廣
いが田圃ぢやねえ、邸地の百坪ばかり、やがて別荘
でも立つか、地ならしをして草も生えねえ處を指い
て、

「花は彼處に、・・・・・・・・おほ綺麗だ。」

と美しい聲をして、爪立つて、身を絞つて言ひなさらあ。私あ悚然としたくらゐだ、お前さん、何の事はない、川向うに道成寺の鐘があらうと云ふ風だね。」

和尚は俯目に溜息して、

「いや、御心中お察し申す。」と、頂く體に掌を額に當てる。

伊之助は其を見て、

「私だつて、お察し申しましたぜ。へい、憚りだがね。そんなに欲くつて居なさるんかな、可し、來たり、花束薪の意氣込で、矢張り伸上つて向うを見たらがね。」

「何も見えまい。・・・・・・・・彼岸ぢやからの・・・・・・・・」と一人で呑込む。

「彼岸ぢやねえ、お前さん、彼岸花なんか、晝見

りや川縁の畝にべた一面だ、そんなんぢやねえ。嬢
さんのは。・ ・ ・ ・ 桔梗、女郎花なんか、お馴染
だけれど、何だか名の知れねえ、種々な花が、月夜
の虹のやうに、とあの人は言ふんだがね。がら／＼
の花がらくりを慌て、倒に當てたんぢやねえが、私
には、三味線草も犬じやらしも、其の地面にや些と
も見えねえ。仕切つた隅つこの方に、唯、新しい材
木ばかりが、ごつ／＼して居ら。

よく／＼聞いたたら、串戯ぢやねえ。嬢さんが欲しい
と言ふ草花は、地の下に潜つてるんだつさ。

あの、地面は何だつてね、つい近い頃まで、大き
な花畑だつたつてね、素晴らしい大輪の薔薇なんかも
澤山ある。・ ・ ・ ・ 菖蒲、紫陽花、芙蓉、朝顔、船
來のも何でもあつて、夏向きや、客も入れたさうだ
し、濱の異人館の宴會の時なんか、可いお寶を取つ
たつてさ。

氣のねえ私なんぢ、お十夜の見せ物の看板ほども
目につかねえが、去年なんぞ、仕事に行歸りに土手

を通ると、成程、然う聞きや、ちら／＼と足許に綺麗な雲が見えたつけ、つい草鞋の尖が浮いたもんだね。

其奴を心ねえ徒が、土砂を振つて、べと／＼と泡雪のやうに消し了つたんださうだね。植ゑた草を、植ゑたものが埋めるのも勝手だらうが、あの花畑は其ばかりぢやねえ。以前、姫島の女神様が、美しい花を植ゑなすつて、それから自然に綺麗なのが咲く、不思議な場所だつて、……先刻嬢さんが然う言ふんだ。」

「姫島と言や、然うだ、和尚さんの御堂だね、何
 ですかね、眞實の事ですかね、」

露に重ねな鎧の袖を、月に捧ぐる腕組みしながら、
 「其の事は、私が貴女に話しました。最う、三日
 措きぐらゐには、節々參詣に見えられたでな。尤も
 他からも聞及ばれたか、其は知らぬが、何しろ、實
 證もある事で、村里のものも誰知らぬのはありませ
 ん。

其は、今から干支を舊へ一廻り、」

と、星を仰いで指を繰つて、

「前の辰の年、此の里の洪水のあつた時ぢや。い
 や、唯今でも土地のものは、其の事を言ふと身震ひ
 をします。可恐い天變での。海には高潮、川には荒
 波、風は樹を薙ぎ、屋根を飛ばし、雨は瀧津瀬、車
 軸を流す。．．．．僥倖とそれ、大川のない土地
 ぢやに因つて、人ぐるみ家を流すほどの事はないで、

さして人命に觸りはなかつたさうに聞きますが、其の騒動ぢや。濱方漁場には海の幸が絶えてなし、村里に野山の幸、米、麥、粟、黍の類は言ふに及ばず、垣根に植ゑた南蠻黍まで、小溝の芥と成果てる、

近郷近在、皆目の厄年ゆゑ、それ、食べるものが頓とない。家財は朽ちる、家は腐るの。老若男女、骨と皮ばかりに成つて、猫より前へ嬰兒が死ぬるぢや。夜が明けても鶏は鳴かず、瘦せ衰へた犬どもが屋の棟をのたり歩行く。何と！ 怪しい坊主が雲に乗つて、地獄は此處ぢや、と鐘を早めて叩かぬばかり。餓鬼、畜生、修羅一齊の業體、裸の蟲がうよ／＼として、半死半生の牛馬に噛りつく、酷い有様、言はうやうはなかつた。

其の中へ、何處から知らず、世にも艶麗な女性が一人。二十あまりの、尋常な髪容。小褌を取つて、草履を召したわ。色の雪のやうに白やかなのが、田植笠に紅の唇。霞のやうな後毛かけて、ものも、包ましい風采で、然も、いそ／＼、泥水も

未だ引切らぬ、村の中を彼方此方、びしよ／＼と最
惜げな、其の素足のまゝ渡らるゝが、雨揚句の油早
だら／＼蠟燭のやうな汗の流れる暑さよ。．．．．
空には黄斑牛の生皮を剥いで覆被せたやうな、赤、
黒、斑の雲が湧く。．．．．其の下を通らるゝ。
とさて不思議なは、影の周圍が空晴れて、月夜のや
うに蒼々と涼しく晴れて、溜水も紫陽花の花に乗る
やうに、白い爪先に淺黄に水の輪が散つたと言ひま
す。

が、其は氣が付いた後の話

――

處で、其の女性は、何のために然うして地獄のや
うな村に出られたと言ふに、さあ、こゝでの話ぢや。
枝、莖なんど、緑の葉を濃く、片袖に、恚う抱い
て、

と卯花緘の鎧の袖を引合はせ、揺直し、月の光に
凝と見て、

「胸に附いたは、薄紫、眞紅に、透し、朱鷺色、

絞り、黄に、白玉。霧のやうに軽い花、瑪瑙のやうに重い荅、匂を雲の袖に包んで、一枝二枝、涼しい風も、其の花片に、ひら／＼と優しく揺るゝのを、小笠はづれの眉を翳して、

「これ、上げませう。」

と小柴垣。．．．粗朶垣から伸上つて、

「花をあげませう、皆さん。」

と井戸端から、又納戸から、．．．臺所口の溝にも立ち、．．．筵戸の蜘蛛の巣も厭ふ色なく、おつしやつた。

紫の雲に乗つて、屋根へ立ちもなさるゝ事が、溝には鼠の死骸もある、茨の垣は頬に痛し、節分の取残しに、戸口に其のまゝ刺棄てた、赤鯛も腥い。柊も植ゑたれば蜥蜴蛙を磔した、鴟の贄とか言ふのもありうち。

其處を、あなたが、笠めして、泥水の炎天を。．．．あゝ、お優しい。」

く。
と聲こゑを掠かすめて、
姫島ひめじまの法師ほふしは、
偶ふと雙眼さうがんをしばたゝ

伊之助も聞入つたが、和尚の言の途絶えた時、恍惚した顔を上げて、

「あゝ、眼前にちら／＼して来た。．．．．．和尚さん、先刻、あの人が、矢張お前さんの今の話と同じ事を話したつけ。．．．．．其の何だね、辰年の洪水の時、姫島から出なすつたつて、其の姉様が、花の一束、其の何だつけ、紫に黄に桃色なんぞか。其を片袖に、恁う抱いて、片手に優しい枝を舉げて、

『これ、上げませ、う皆さん。』．．．．．ですかい。

然う言つて、背戸や小窓から百姓家を覗きなすつた、と話しなざるのをね。私あ凝と恁う聞いて居たと思ひねえ。．．．．．其處等の、麥も、粟も、水田も、土手も、一面の花畑に見えて来た。中にやお前さん、圖抜けた向日葵か何か知ら、お月様とさし向ひで大輪にばつと照らあ。萌葱、淺黄、眞蒼に、

大きく細く、透けて見えて葉から葉へ露が轉がる、
と一つに成つて、銀の、お前さん、絲のやうに根を
走る。

今思ふと何でせうよ、背高の薄が化けたんだ。何
やら其の、すつと立つた大きな花の莖の許へ、ふは
りとしたやうに背中を恁掛つて、其の人がね、和尚
さん、肩から片頬を隠すやうに、ひら／＼と白い扇
を使ふ。

餘所ゆきの支度だね、成程團扇をぶら下げたでな
し、庭下駄で出たんぢやねえ。

「藪蚊が來ますかね。」

其時、私あ、詰らねえ事を聞いた。同じ事を最
些と氣取れば可かつた。・・・藪蚊ぢやねえん
で、蝴蝶だ、二つばかり、月に羽は薄いけれど、夜
露に重さうに、翻々として、時々ぼつとりと嬢さん
の袖に縋つた。

花だか、人だか、恚う成ると分らねえやね、唯良
い薫が、扇子で揺る。私あ、氣も魂も包まれて夢見
るやうに茫と成つた。」

「其處ぢや、」

と和尚は小膝を拍ち、

「何と主は、其の時には、酒も煙草も忘れたぢや
の。」

「えゝ、唯最う私あ、」

「幻の花ばかり、」

「へゝゝ、顔ばかり・・・」

と天窗を撫でる。

「否、顔にても構はんぢや。あゝ艶麗なと見惚れ
た時は、ものも欲しうは思はぬ。主がシャヴルで其
の背を打たせ申して、痛うはないと覚悟したも其の
理合、但し盜賊に成つては成らぬがの。」

處で、洪水の時の、姫様の其の花お持たせの思
召。・・・われら下根が強ちに當推量をするで
はないが、苦しむもの、悩むもの、煩ふもの、飢餓

渴^{かつ}ゑた村^{むら}のものを、其^{それ}で助け^{たす}うとなされ^なたらしい。

『此^この花^{はな}をあげませう、皆^{みな}さん。』

『たび候^{まじ}へ。』

と受^うけて見^みなさい。．．．．如何^{いか}様^{さま}、肉^{にく}のあり
さうな骨^{ほね}とあれば、芥^{はき}溜^{だめ}を探^{さが}しても飽^あ足^{きた}らぬやうな
場^ば合^{あひ}、悠^い長^{じゆう}らしい、紅^{こう}白^{はく}の花^{はな}を何^{なに}にする、と思^{おも}はう
が、さ、花^{はな}には甘^{あま}い蕊^{しへ}もある、．．．．美^うはしい
露^{つゆ}もある。菊^{きく}川^{がは}の流^{ながれ}を汲^くめば齡^{よほひ}を延^のぶると言^いふ事^{こと}よ。
ー 其^その葉^はを取^とり、花^{はな}片^{びら}を切^きつて食^たべて、腹^{はら}は
満^みたぬにした處^{ところ}で、心^{こころ}さへあるならば、死^い生^きの境^{さかい}に
呻^{うめ}吟^{めい}くものには、見^みたばかりでも一^{ぶく}服^{ふく}の清^き涼^{りやう}劑^{けい}には
成^ならうもの。

さて、胸^{むね}を通^{とほ}つて、心^{こころ}の清^{すが}々^くしく成^なつた時^{とき}、静^{しづか}に
食^{じき}の計^{はかりごと}も出^で来^きようぞ。 二^{あせ}り悶^{もが}いて目^めが眩^{くら}んでは、
膳^{ぜん}の上^{うへ}の箸^{はし}も取^とられぬ。

其^その花^{はな}片^{びら}を浸^{ひた}さうなら、沸^わ立^{きた}つ濁^じ水^{りみづ}も冷^{つめ}く澄^すみ、
其^その一^{いっ}葉^はを摘^{つま}まうなら、塞^{ふさ}がる胸^{むね}も開^{ひら}かうものを。さ

て／＼、濱にも、村にも、唯の一人、這出して瘦せ
た手を出すものはなかつた。

倒れず流れずにあるほどは、牛部屋馬小屋に烏瓜
の蔓も枯れて、霧を吐く明もない、眞暗な中まで、
密と覗いて、隅々まで、凡そ、三日。朝疾うから日
の入るまで、其の御姿で、家毎軒毎。

袖の蔭に日を除けて、御手の露したゝれば、花の
色は彌冴えて、薫は里に襲襲いたが、松の葉とさへ
いふものを、志を誰も請けぬ。剩へ！
と云ふ、肩聳ゆ。

「悪口雑言、山の芋か通草か、生で食べるものを
 おこせと言ふ。氣の利いた狐なら、稻荷堂の強飯な
 と持つて來せ、と毒づく。……精靈棚の素麵
 なら眞菰ごと噛ると喚くしの、何ぢや、べらしやら
 友染をひけらかいて、私は禪も流した、と寐そべつ
 て唾を吐く。……此のまゝ死んでも餓鬼に成
 つて食散らす……。佛ではないに、手向けるな、
 忌々しいと怒鳴りつける。

いや、門端へも寄せつけず、物貰ひを突出すやう
 ぢや。しかしながら、又其の人たちとて、大事な場
 合、無理でもないわさ。

さすがに顔を赧らめて、姫様はうる／＼となされ
 たげな。

三日目の其の暮方に、しを／＼と遊ばして、花も、
 主も首垂れながら、――それ、今線路の土手の
 處――最う村はづれの裏路へ、お懸りなさる。

ところゝに、それ以つての外なは、濱方のあぶれ漁師、荒布の根を嚙つても、難船七日はものともしない、血氣壯な奴等が三人、怪しからぬ心を起いて、後からのさ／＼と跟けて行つた。」

伊之助は力んだ顔色。

「はてね、」

「主にこれ、二階家のお嬢さんが先刻申されたと云ふ花畑の。あれは其の時分用水溜の大きな池で、さしてさびても居らぬが、夕暮は殊に茫として寂寥たる水。一方は山の裾さの、今ある通り。向うに姫島、妙音山の鬱然としたのが、半ば靄に包まれた、あたりは見通しの一面、田畝よ。」

物凄いはたゞ浪の音で、全村たゞ火の消えたやうな折柄ぢや。人影もない。其處で、

「待ちな。」

「待ちなよ。」

「姉え。」

とせゝら笑ふやうな聲で、各自が、一人はくるりと裾を被る、一人はぬいと腕捲り、一人は唇をべりりと舐めて、口々に呼んだげな。

振り向く處を引摺倒して、落花狼藉の了簡ぢや。

するとの、何と、其の女性の背後、三尺ばかり離れた處に、鎧兜。」

「鎧兜！」

と伊之助は、今更ながら法師の姿を瞻るのである。

「さ、鎧兜を袴々と、丁と柄長に支いた鉾が、山の端の月と十文字！ 草摺、直垂、十王頭も、ひたと蒼白い光を潜めて、影のやうに立つたのが、ふつと三人の目に見える、と其の武者がはつたと睨んだ。

はつ、と棒窹みに立つた時の。

姫様も見返られた。が其奴等には目むくれず。夕霧ばかりは美しい、今し出離れた村の方へ、瞳を流して、吃と一目御覽じた。何とも言はれぬ其の威に、

つい、へた／＼と膝頭を揃へて坐る。と小笠を取つて、袖の花を、其の裏返して、さつと入れて、二たをやか娜な御手も凜々しや！ 肱を拂つて、それなりに、はたと池の面に投げらるゝ。

情の露に夕雲かゝつて、美しい水の泡と成つたのを、憤られた色が見えた。

衝と其處へ寄つて、背を向けた、其の武者の鎧の肩に、眞白な手が懸ると思ふと、翻然と負はれた、裾が離れて、姫の姿は、人丈けの中空を。――
小笠はづれた御髪の亂れが、鎧にさら／＼懸つたげな。輝く櫛の月ばかり、姫島の峰に残つた、と言ふ。

處が、池ぢや。洪水が納つてから、小兒たちが策なぶりに、岸を掬ふと、小鮒ぐらゐの、何とも、美しい魚が取れる。いかい事出来た。

名は知れぬが、花のやうに綺麗な處から、海水浴に來たものなどが、活かして土産に持つて歸らうとする、と潮入で、海の魚が、それは成らぬ。

大方、洪水で何處から流し込んだのであらう、
と皆が言ふたげぢや。食べると別に味はない。

拗げ根性のお百 姓徒が、

『藝もねえ、姫島の女神様も察しがねえ。・・・

・草花で納まらなかつたとて魚にして食はして下
さるなら、味醂を入れて煮りや可かつた。薪木費な、

チヨツ、』

なぞとな、沙汰の限りな事を言ふ。」

「現に其の奇特を見たと言ふ三人が三人、ならずものゝ事ぢやに因つて、土地では可い加減な嘘を吐く、と半分は茶にした所爲もあらうが、あらう事か、魚をくれるなら煮て寄越せ、と太平樂よ。」

其の崇か、やがて池の水も涸れた。

が、争はれぬもので、誰言ふとなく、あの邊を、花笠の堤と今でも言ひます。

池の跡は埋地に成つて、久しい間、原場であつたさうなが、主も嬢さんに聞かれたぢやらう。

姫様が、然て尊い花束をお投げなさつた土の所爲か、自づから時々綺麗な花がちらゝ咲いた。同じ露草一つでも、其處のは花片の艶が違ふさうに聞きます。

二三年此方ぢや、あの空地の傍へ、貸別荘が一軒建つたわ。

東京の金貨での、夫婦ものぢや。たまかに大分溜めてござる人物さうなが、其の主人が、肺の病に罹つたげな、何ほ金貸でも病には勝てぬ。

氣長に養生をするつもりで、其の別荘建なのを買求めて、其へ住まつた！ 現在其處に居るのぢや。

此處からは遠うない、あれ／＼、あの屋根ですが。と小手で指す・・・花笠堤を、下へ窪んだ、今も池かと月の隈、霧に眠つた薨の一棟。

「處で、直き裏が、地續きに、それ空地での。ひとりでに種々の花が咲くのに思付いて、持主から借入れた。

先づ借りて・・・さて所々から花草の苗、種などを太いこと買込んで、はじめは主人が病氣保養、運動のためぢやと云うて、花を植ゑはじめたが、其處は金貸、抜目はない。春時の種を夏のはじめには、最う商賣にして賣出したの、二年目には早や、何とか園と怪しげな字のかき比羅を方々へ張廻はす。四辻は、枠に張つた立看板で威いて、入場料を取立て

たわ、いや珍らしいで、人も入る。

尤も舶來の薔薇などには、一廉金も懸けたげな、
利息に餘つて、大分市は榮えたさうな。

今年の春、持主が、此奴また我儘で、容赦はない。
其の地面を賣り渡した。買ったものは家を建てるで、
花畑を、ソレ、返せぢやの。

勿論、年限を極めた譯ではない、茄子でも植ゑて
見たい、で、當座借りに手輕う借りる、貸す方も易
く貸したで、いざこざは雙方ぢやて。なか／＼悶着
したけれど、金貸が負けに成つて、さあ、明渡すと
成つた處がよ。

一畝足らず一面に植ゑたらう。傍へ持運ぶ處がな
いの。こゝで又火の手が上がつた、の。買った方も、
内々花畑に目を懸けたで、見倒しに譲受けうと言ふ、
が何うしても肯かぬよ。

右の金貸、主人は然したる事もないげぢや、女房

と云ふのがの、渾名を花畑の金齒と言ふと、近在知らぬものはない。金無垢の鰐口、赫と耳まで裂けた、細頤の蒼面、眞黒な角の如くに、前髪を突出した、ハイカラとか何とか云ふのぢや。四十左右が二十代の若造り。剃刀刃の舌をひら／＼と翻す・・・所詮これ度せぬ奴さの。

惜紛れの自棄腹で、薙倒す、挫折る、擦つて棄て、掴散らし、俯向けに突込みなどして、一日半日、見る／＼内に、花畑を焼野にした。夜叉の火焰は凄まじい。

おのれ、其の分なら張負けようか、と買手も買手ぢや。右から左、人足をどうと入れて、いや見る影もなく地装をしたわ。

其の癖、家がまだ立つたではない。
と云ふ次第ぢや。

然う、風説が聞えた時分から、あの、二階家の嬢さんは、お山へ参詣に見える毎に、御自分の櫛笄を、穴へ埋められでもするやうに、惜しがつて、あはれ

がつてござつたが、―― あゝ、其では今も氣に懸つて、

と言懸けて、遙かなやうに、其の空地を、雲見る如く見つめたが、瞳を伊之助に返した時、何故かはら／＼と涙を落した。

「分つた、えゝ、」

と蹲んだ膝に頤杖して、

「先刻も分つたんだが、半分夢中さ。其の顔ばかりの一件でね。」

「今の、お前さんので熟く分つた。でね、嬢さんも其を言つたんだ。草花は、恚うやつて人目を忍ぶほど欲いけれど、唯それだけなら、何も、人の庭のものを目懸けはしない。今明地の其の花畑のは、姫島の女神様が田植笠で投げなすつたのが咲くんだから、根を取つて、自分の庭へ移したい。」

まだ、こんなに地に埋めて了はない前も、拜まぬばかりにして、根なり種なり分けて貰はうと思つて、幾度も頼んだが、持主が、……何だつてね……意地くね悪く、言ふ事を肯いてくれな
いんだつてね。え、和尚さん。」

「其の事さの……地體、そりや先方は商賣ぢやで、きり花は代さへ拂へば、望み次第に賣つたさうなが、根どころか、種も分けぬ。何うやら、姫様の奇特を知つてから、持主は尚ほ料簡が狭う成つて、自然に生える蓼の花一房も、傍へは遣るまい、としたらしいぢや。」

姫島の其故に、望みぢや、と言ひなすつた嬢さんの出方が悪かつた。

其の癖、金齒とは知己なのぢや、と言ふのが、兩方とも、主人が病氣な處から、ヤ、咳が籠むわ、胸が痛いわで、時々間に合はせは土地のお醫師ぢや。薬取りなどで出會ふぢやでの、座敷へ出入るまではなくて、花畑へは、一寸々々、嬢さんの方が出懸けなさる。

こりや私への話ぢやがの。

何時か中も、お嬢が花畑へ行かれて、見なさると、雛芥子が盛ぢやつた。さて、見渡した處で、一面の草花。どれが姫島の種から咲いたのか、其は分らぬ。が、御自分一念で、これが、美しいと思ふで可い。たとひ金齒が植ゑたのでも、姫島にあやかつた色々なれば、と衝と胸へ浮んで、目にちらつく、其の雛芥子の花を選んで、三本五本、根ながら譲受けたいと頼みなさる。

何か早や、半ぺら女異人の服装で、得意顔に、其

處ら見せびらかしながら、人の羨むのを嬉しさうに、
傍に附いて廻つた右の金齒が、

「否、根ごとはなりません。第一恚う花の咲いた
處を、炎天に植替へては枯れて了ひます。」
と言つて、海水帽を横ちよに振る。

嬢さんが、

「では、種に成るのを待ちませう、一粒でも其を
譲つて下さいまし。」

こりや成らぬとも言へないで、承知をした。・・
・・處でぢや、思込んだのを見違へまい、枯れて
は孰れも同じに成つて、色の見分けがつくまいと、
心覚えの朶を、と云ふ處が、懐紙では、雨にも風にも
堪へぬ氣での、髪の丈長をばつさり解いて、きり、
と結んで歸んなさつたと。

待ちに待つて、頃合に出直すと、可愛らしい芥子
坊主が、ころ／＼、子を捉る、とそれ、日向に澤山
遊んで居る。

縫着くやうにして、見覚えのを、と葉を分けると、
葉は雨風にも亂れないで、丁と結ばつて居たは可い
が、何と！ 五本が五本ながら、生々しい痰唾が、
芋蟲をちぎつたやうに、どろり、かつと吐掛けてあ
つたは何うぢやい。」

「いや、途方もねえ、聞いても癪だ。・・・
合點ならねえ事をしやがる。其の何、金齒の爲す業
だね。」

「企んでせんで、皆が皆、痰の掛る法はない
の。・・・私も確に然う思ふ。婦は容色の嫉妬
から仇敵にも成り兼ねぬ。銜妻が業に極まります！

「何しろ其奴あ、只置かれねえ代物だね。」
と引拂く雁首は、腕が走つてがうちり石に鳴つた。

「まだ、なか／＼金齒の仇は、其のくらゐな事で
はないが、先づ主はそれから何うしたの。」

「え、私と一所に土手から明地を視めながら嬢さんが姫島の其の話だね。」

それもあるしさ、いろ／＼の草花が、あの下に成つて居ると思ふと、あつたらもので、而して可哀相で、自分の呼吸も苦しいくらゐ、地を分けて、穿出さうと思ふ。

ねえ、花片が、切なからうつて、御自分も切なさうぢやねえか。」

「其のときだ。顔の色も變つたやうで、呼吸忙しうにね、和尚さん。嬢さんの胸も眞白な花で、ひら／＼と夜風に揉まれた。一も二もありやしねえ。

『さあ、おいでなさい。私が掘起して上げませ

う、

ッて、お誂だ、シヤヴルは持つてるし。

處が何うです、何本目の松の下を何の方角へ何寸と、見當があるんぢやねえ。明地の下は平一面の花畑だと言ふんでせう。が、何の砂地だ、一皮くれえ、十坪や二十坪一息の私あ勢。

此奴も蜆貝で大海ですがね、嬢さんの方は簪の耳で須彌山だね。・・・成程一枝折らう、ッて考でねえ、地を掘るつもりだ事は、花剪刀處を、・・・お前さん、手に持つてるのが、あの何とか言ふ、草花採に使ふ鏝なんです、其で解つた。

譯わけを知らねえ内うちはね、私わたしは何なにを持もつて居ゐるんだ知しら、と不思議ふしぎだつた。恚かう見みると、尖とんがつた軍配團ぐんぱい扇はツてものらしい。そら、あの。」

月つきはやゝ傾かたむいて、姫島ひめじまの峰みねの黒髪くろがみなすに、玉たまの桂かつらの七星掛せいかる。

「稻妻いなづまのやうな星ほしの下したで、指ゆびを折をつてる人ひとが、よく持もつてら、」

「唐からの大將たいしやうの采配さいはいぢやの。」

「然さう／＼、軍師ぐんし孔明こうめいの繪ゑにある奴やつだね。私わたしあ、嬢ぢやうさんの持もつてるのを、其それかと思おもつた。」

さあ、土手どてを一ひとなだれ譯わけはねえ、直すぐに其その明地あきちへ、と草場くさつばへ踏掛ふみかけたがね、先刻さつきも言いふ通とほり、をか
しな事ことは、田たの縁ふちのぢよろ／＼水みづが、霧きりの所せ爲ゐか、
靄もやが化ばかすか、渺ぼつとした、廣大くわっだいもねえ大河おほかはに見みえてな
らねえ。

うつかりすると、どぶりと來きさうで、變へんに覺束おぼつかね
えからね、……ふと考かんがへて、お前めえさん、半纏はんてん

を包んだなりで、引擔いでたシヤヴルを、ト取直いで、土手の上から、川越しに、仕事をしようツて明地を目懸けて、ポンと投げた。
トン、と耳の際で音がした、直き其處だ。

お剰に、足許の草場は、夜露でびしよ濡れで、眞蒼な水のやうだが、明地は砂場だね、投げた途端に月夜へ薄い埃がぱつと上つた。

可し、來た。

で、嬢さんは、と見ると、濡れるのも構はねえで、最う土手を下りて居なすつたつけ。薄を遙ぶる小川がありまさ。あれだつて、野郎も大跨で發奮まにや成らず、螢が飛んでも、三尺の蒼い影を、スイと横ツちよに引くんだからね。

婦ぢや、それ、裾ばしよりで、雪を散らさにやなりません、蛭が居ようし……

「おんぶをなさい、」
ツて私あね、突然背中を向けたもんです。

ずいとかゝつた兩袖が、頸筋からひやりと来て、
總身へ、恚う、じわりと染みた。お前さんが被て居
なさる、其の銀びかの鎧を取つて掛ける時の、心持
は知らねえが、私も生れてはじめてだ。嬉しさに、
魂がふはりとして足も地に着かねえやね。

「翻然と飛んだ。」

「負ひ申して、や、偉い！」と言つて、和尚は
中啓を颯と開く。

「身の軽い事あ生得だね、木登りなんざ、猿のや
うだ。」

と頬を撫で、
「尤もね、餘り懸離れた中ぢやねえ。」

和尚は中啓を疊みかけて、緩く折目を拾ひながら、
「待ちなさい。すると、何、お職人お前さんは屋
根飛と云ふ人ではないかの。」

「屋根飛、」

と妙な顔して、

「異おつな名なだね、山やまとび飛とびてんです．．．伊いのすけ之の助すけツ
て言いひますがね、．．．はあ、屋や根ね飛とび、屋や根ね飛とび
か、此こいつ奴やつあ可いい、」

「むゝ、實じつみやう名なは、山やまとび飛とびと言いひなさるか。」

「渾あだな名なは鳥からすでも構かまはねえやね、」

「いや、其それで分わかりました。嬢ぢやうさんが、御おだう堂だうへ來こら
れて、時とき々はし噂はしされた兄にいさんぢや．．．」

「嘘うそだ、和をしやう尚やうさん。」

と無む邪じや氣きな聲こゑ。

「なか／＼嘘な事は決してない。．．．然れば必定主の事ぢやが、嬢さんが間違へられたものかな、其とも故と軽口に言はれたか、何時も屋根飛さん、と恚う言うての。」

「嘘だ、和尚さん、何てつて、」

「きび／＼とした、頼母しい若い衆だとの。」

「串、串戯ぢやねえ。」

と伊之助は汗ばんだ、と見えて、掌を揉むだ。が、風白ければ、其も清しい。

「眞個の事ぢやよ．．．ありやう嬢さんはの、其が執心で住みなさつた、あの二階家を青葉で包んだ、隣の森の伐らるゝのを、悲しがつての、さく／＼と斧の入る毎に、涼しい山も、美しい雲も、ざわ／＼と崩れ懸り、倒伏すやうに思はれたものぢやと言ふ。

それ、縁の繡眼鳥が啼く聲も、故郷の巢の亡びるのを悲しむやうで、胸に響いて痛んだげな。

愈々がらあきに成つてからは、住居も丁ど、荒磯に野宿のやうに果敢なかつたが、柱立てが出来る頃から、棟上げの日を掛けて、目覺ましい、主が働き振りとかよ、の。

曳々聲して大勢が、眞黒に成つて捲き上げる、梁の五寸角を、廂の上で抱取つて、引組んで、肩を合はせて、横木から横木の間、蒼空見通しの雲の下を、やつと諸足を揃へて、材木なりにずるりと、這る、額に血が湧く顛巻よ。

材木に乗つて、腹這ひ、縦横十文字に雲の中を駆ける。すらりと立てば、翻然と飛ぶ、飛ぶと見れば、掛矢を掉つて、諸手打に、や、と打つ、とかつと鳴つて楔が極る。と又草鞋を揃へて、飛移つて、踏留りもせず、柱を丁々！

覗くものやら、跨ぐものやら、傳ふものばかりの

中に、一番年の少いのが、天狗が棟上げを手傳ふやうな。

「名さへ屋根飛と言ひます。」……さうぢや。最う其のきび／＼した、勇ましい、頼母しい容子を見たので、森のなくなつたのを、髪の抜けるやうに、白髪に成るやうに思つた、病氣でござつた御主人も、諸共に、虚空へ猪が躍出した體の――其の屋根飛ぢや――主の逞しい働いで、胸が透いて、氣も引立つた、と申してぢやつた。

其の縁でがな。」

と云つて、和尚は眉を深く、目を瞑つて、

「一念を果すに、頼母しい主の力を藉られましたものと見える。……然も貴女を負ひ申して、花笠堤を飛越えたぢやの。いや、結縁と云ふでかな。それ、幻の鎧武者が、其處は、姫島の姫様に、背貸しました處ぢやわ。」

「はてな、むゝ、然う言ひなすりや、時代と世話

だが、同じ舞臺だ。……待ちねえ、其ン時一番、お前さんの其の鎧を借りて被て居りや可かつた。

成程ね、私もお嬢を負ぶして飛ぶ時は、人間離れがしたやうな氣持だつけ。……此方あ可いが、紺めくらの股引に草鞋穿きの土方ぢや、負さつた姫様が納るめえ。而して和尚さん、お山の其の武者と云ふのは……一體何だね。」

「御前立でおいでなさる。」

「御前立つて？」

「姫様が、妙音山、姫島の御本尊。御前立は先づ、其の兩腕と成つて御守護も申され、お働きもなさるゝぢやよ。」

「はあ、腕かね、いや、勿體ねえ、雪と炭、飛んだ腕だ。」

と顛巻へ突込んで、

「然うすりや、お嬢は本尊かね、えゝ。處で、何の、姫島の其の姫様と云ふは、どんな方だね。」

「辨財天でいらつしやる。」

「はあ、七福神の別嬪だ。」

「然れば、……妙音天女の由にも申傳へる
ぢやが、活神であらるゝだけに、極めての秘密での。
御堂に祭つた、御厨子と云ふが一尺四方ばかりのな
れども、御扉は昔から堅く開けますのが禁制ぢ
や。……堂守の私とても、恐多いで、まさし
くはお拜み申さぬ。」

「但、奥の院が、御堂の背後、岩山の岩に洞窟があつて、向ふと満月、左へ折れて弓張月、其中を右へ廻つて、半輪の月の形、三段に、自然の石の室がある。中はいづれも、からりとして、削つて磨出したやうに、日の光も、月影も微妙に透る。剩へ、切立てた其の山懷は、階子しても手は届かぬが、雪中にも、もみぢが残つて、白、紫の、何時も草の花が咲満つる。董、白百合、龍膽が朗かに緑を分ける。……白衣を着て室へ入ると、巖から透いて、五色の彩が、袖に袴に映ると言ふ。」

こゝの新月の巖室に、奥深く、獅子座の石に据ゑた御厨子は、却つて、あからさまに誰も拜むが、別に何の御像と云ふもない。絲の纏れが白光のやうに、尊く輝く古金欄の、箱せこを、兩つに開いて、色紙形の小さなかゞみがあるばかり。」

と和尚は語つた。

「他にはあるまい、其のみが御本尊。堂の厨子に

は神も佛も安置してはなからう、と一頃は麓の人が
思極めて、何時かは堂守も置かなんだ。

妙音山は荒次第、御堂は雨風に破られて、山路も
草に埋まつて、落葉が潮風から／＼と、賽銭箱の
轉がつた上を舞うたと云ふ。

其の内に彼の洪水ぢや。

姫様が里へ出させられた、と風説が村へ傳はつた
時ぢやつた。

役場へは勤めるなり、村會議員で幅をする、舊が
庄屋の家柄の奴。いつも黒眼鏡で山高帽子よ。

これがの、傍土地から流れて来て、里のもり蕎麥
と夫婦に成つて、雑貨とか云うて、荒物を商ふ、べ
んちやらものゝ、阿漕な、野幫間がはりの。口合友
達。

『山の上の龍宮へ、』

と頭から仇口吐いて、

『行つて見ろ。』

で、出懸けたげな。

姫様の御堂へ着くと、賽銭箱を床几にして、股へ
落葉を搔込んだわ。洪水の納まつた秋の末で。

茨さいかち、ばちノと火を燃やいて、竹の皮包
みの鹽鰯を焼きはじめた、酒の肴に。尤も四一合入、
壇三本と提げたげな。

「鼻をひこつかせて出てござれ。」と、お山を
鰯の臭氣にして、手掴みに身をしゃぶつては、其處
等へ骨を投散らす。

其はまだしも、――あらう事か。

「此奴は何うで。」と荒物屋がお追従、惡落を
取る了簡で、袂に忍ばいて居た、反古づゝみの茸よ。

兩人呵々と笑つて、十二分に酔うたり。

「それ、拜め。」

「どりや、どりや。」

と床板へ土足で上ると、鯛の煙のむら／＼と懸る
中を、御厨子へ荒物屋が手を懸けて、何と、御扉を
ギイと開けた。

處へ黒眼鏡を突出いたわ。

端嚴美麗な御面が、ちらりと拜まれたと思ふ間も
ない。御前立の守護神二體、一體は長矛を提げた、
爽に鎧うた天將。一體は、玉なす胸に天衣を斜め、
顯はな右手に明晃々たる劍を翳した神童の、雪なす
肩に颯と捌いた、振分髪ふりわけがみの立像りつざうと、此だけは一目確
に見た。

と思ふと一緒ぢや。左右から、天將と神童と、鎧
の袖と、白い腕と、高く組んで衝と擧げて、娘様の
お姿を其のまゝ颯と庇うたれば、また一度とは見え
なんだか、目前の其の奇特に、尻持をつく、倒れる
で、可い加減に揉消しながら、衣類を焦がいて、這々
の體で下山したげな。

其の夜が更けると、松原で見た。土橋で見た。地
引網の綱二條に白濱へ分れた細い人数。沖は船でも

見た。尤も其の徒は、たゞ姫島の頂から、一幅の光
物、銀河に薄く、森に濃く、花笠堤を颯と切つて、
村へ入ると、二條に虹を裂いて分れたが。」

二十四

「洪水の、未だ小田原評議で、村に寄合のある頃
ぢや。……提灯点けて、のそ／＼と歸るのが
點々あつたで、間近なものは、頬被の上を、其の光
りものゝ中に、あり／＼と鎧を見た。其の神、長矛
を脇挟んで、風音を立てゝ飛ぶ。振分髪の子童は、
あの右投げの革見るやうに、劍をくる／＼と環に廻
はして、莞爾しながら空を馳るが、二體、青白う輝
いて拜まれたげな。

それ、其の村の入口で、光りものが二つに成ると、
一つは村會議員の、一つは荒物屋の棟へ、矢のや
うに、翻然と留まる。

あれ／＼と言ふ程こそあれな、をがみ突と、横薙
ぎに、矛と劍と、兩方の屋根瓦に閃めいたと思へ。

夢の覺めた體に、御像は颯と消えたが、さあ、鹽

鯛と松茸は、其の夜其の時からた打廻す。

一郷七ヶ村が僧を請じ、供物を備へ、旗を靡かし、列を作つて、姫島の路を清め、落葉を掃いた。

先達の道徳が、ト珠数を揉んで、静々と御厨子の前に參つて見れば、何時の間にか早や其の御扉は閉つてあり。

然やうな譯ぢやで、流れ渡りの修行者が、難有い結縁に因つて、恚うして堂守はして居るが、大切の事ぢや、お姿は拜みませぬ。

が、着て居る、此の鎧ぢや。薙刀と一緒に、古く御堂あつて以來、御山に傳はつて居たものを、一時出入れをする堂守もなかつた頃、藏ひ置く、と言ふ名義で、錢金の前、人には口を利かせぬ地面持が、體よく横領に及んで、床の間、承塵に飾つたげな。・・・勿體ない、五月三月の節句には、嘸ぞ、薄汚い小兒等が手を懸けた事であらう。

屋根の祟りに舌を巻いて、羽織袴で御堂へ返した。

處でぢやの。

奥の院に祭つたのが、古金襴の箱せこなり、御前立に鎧うた神も、古の武者のやう、傳はる寶物が卯花緞ぢや。

フトすると姫島の女神は、仔細あつて、其の古、主が先刻見申した、今の嬢さんのやうな方の、荒靈であらうも知れぬ。

ともあれ、目のあたり活きて居らるゝ。「
と言つて、草摺に兩手を支いて、法師はゝつと敬ひ參らす状である。

「何、活きて居らるゝ。」
と話は一句切の煙管を兩提へ、ぐい、とさして、
「死なれて堪るもんかね、あの人が死にでもすりや、私あ、お前さんの弟子に成つて、草花ばかり構つて居らあ。」

「さて／＼同じ心かの。」
と顔を見る目に、露が宿る。

ふと思出したやうな顔色で、

「然う云つても、嬢さんは何うしたらう。餘り私
あ、トツチて居て、見はぐしたがね、何も別條はあ
りやしないやね、ねえ、和尚さん。」

「然れば……。」

と云つて、考へて、

「一體、主は、あの方に、何處で何うやつて分れ
なさつた。」

「其奴がだあね。ほら、負つて小川を飛越したわ、
可いかな。」

明地へ入ると、さあ、來いだ。眞中から土を拂つ
て、一番、ありつたけ掘出して上げよう、と御注文
通りに、シヤヴルをさく／＼入れた。酷く遣つちや
不可い、上面だけ。葉を痛めると可哀相だからつて、
嬢さんが言ふんだがね。

何、其までもねえ、私も驚いた。些とでも地が切れると、さつと白くなり、紫に成つて、ちら／＼と、・・・・いろいろな花片が重なり合つて、而して、今まで、然も切なかつた、と云ふやうに、ひら／＼と震へます。嬉しさうに莞爾、唇を開けるやうな紅のもあり

嬢さんも、いそ／＼しながら、堅く成つて、手に震へが来るやうに、仕事にこつてお前さん私の手下で、鋤を働かして居なすつた。

何でも、一刻も早く草花の皆に、呼吸をさせてえんだ。・・・・

「私も其の氣だ。此處だ、と仕事を氣張つたもんです。

瞬く間に、お前さん、ものゝ八疊敷くゞらぬ、美しい花畑に成つて、月夜の虹のやうな中で一呼吸ついたわ。と其の虹の、お前さん、どの花も又呑氣ぢやねえか。今まで地の下に成つてたのが、最う露をうけて、一輪づゝ、清しさうにひら／＼遣つてら。

また……薫のよさつたら。へ、不躰だけれど、お前さん、以前に袖が觸つたゞけでも然うだ、……まるで以てね、お召縮緬に包まつたやうで、恍惚ぽかんとして、シャヴルを支いて立つたいと思ひねえ。

ぐわう、と大砲の通りものゝやうに地響きが雲を抉つた。

貨物汽車だね。夜中のまた、あの音と云ふものが、前後が消えて變なもんだね。

私^{わつし}あ耳^{みみ}がピリ々として、五體^{たい}がぶる／＼とした。
ヤ！ 珍事^{ちんじ}ちやうやう氣^きが違^{ちが}つたか、轢殺^{ひきころ}されるぞ。

月夜^{つきよ}に黄色^{きいろ}い花^{はな}も鮮麗^{あざやか}、明地^{あきち}が花畑^{はなばたけ}に成^なつたも怪^{あや}しい。居^ある嬢^{ぢやうぢやう}さんも美^{うつく}し過ぎる。何時^{いつ}も夢^{ゆめ}に見^みる人^{ひと}だから、酔^よつたまぐれに、夢^{ゆめ}かな、此奴^{こいつ}あ！ 其^{それ}とも己^{おれ}を現^{うつ}にしたのか、花^{はな}の中^{なか}だと思^{おも}ふのが、線路^{せんろ}の上^{うへ}かも分^{わか}らねえ。

死神^{しにがみ}なんて言^いふ奴^{やつ}は、恚^かうして人^{ひと}を捕^とると聞^きいた、
た、
た、
た、
た、
お前^{めえ}さん。

踏切番^{ふみきりばん}に突飛^{つきと}ばされて、漸^{やつ}と一命^{めい}を取留^{とりと}めたが
ね、
ね、
ね、
ね、
五三^{ごさん}のお齋^{とき}の座^ざに、床^{とこ}の間^まを背負^{しよ}はされる、と見^みて、
汽車^{きしや}の來^くる線路^{せんろ}の上^{うへ}へ、シヤに構^{かま}へた、と言^いふ奴^{やつ}が、
私^{わつし}の夥^{なかつ}間^まにあるからね。

なんて、一齊^{いっとき}を込^こみ上げて、くわつと成^なつて、其^{それ}で
も一枚^{いちまい}着^き切^きりだから、半纏^{はんてん}を引浚^{ひつさら}つて、天窓^{あたま}へ載^のせ

た、と思ふも夢中で、目が眩んで驅出したが、今考
へりや尚ほ危え。――居た處は矢張り明地で、
飛出したのが土手の線路。

追懸けられて居るやうな氣で、貨物汽車の通つた
あとを、一目散に飛んで来て、今度は腰を抜いたあ
ね。

お前さん、突然鼻先へ薙刀がびらりぢやねえか。
と見ると今時、何と和尚さん、鎧甲でのツしと立つ
てら。幟の錘馱様が抜出したつて、一寸、斷つてく
んなさりや、あんなに膽は潰さねえ。娑婆も兄哥も
亂離にして、尻持を支いぢや納まらねえ。」

和尚はわけもなく頭を壓へて、
「いや、御寶物の威徳かして、村の犬には吠え
られぬが、人に見せられる装束ではないに因つて、
故と、それ、めつたに通るものゝない、線路を傳う
て下山したぢや。」

遠くから、土手へ蹲んで、汽車はよけたが、のさ

／＼と歩行き出すと、唐突に主が鐵砲玉のやうに飛んで来た。……今ソレ目前を走り去つた機關車の欠が出た、とな、實は私も肝を冷した。

何の、せずとも可い事を　ー　ありやうはの、
姫島の姫様、現にましますが如くぢやで、　ー
人の見ぬ夜分なの、時々此の鎧を着け、腹巻を締め
小手脛當まで、かつしとして、妙音山に灯一つ、御
堂の縁に御厨子に向うて、はつ、と申して平服する
ぢや。

『めされましたか、はゝあ、はつ、　ー　』
との。

然うすると、何となく、微妙な御聲が聞えるぢや。
其の嬉しさ、か忝なさ、尊さに留められぬ。つい
な、敵もあらば、姫神の御前に、此の身體寸斷々々
にして惜うない心で居る。

月でも、闇でも、薙刀を杖に支いて、ゆらり／＼
と山めぐり。虚空には音楽聞えて、花咲く中を卯花
織、薄に草摺摺つて行く。奥の院に詣づる時は、

此の世を離れた前生の雲に乗った思があつて、つい
言ひ知らぬ嬉涙ぢや。

今夜も又此の甲冑して、御堂の縁へ畏つて、

「召されましたか。」

と遣つたがな。花笠堤へ參つて、あの、お嬢様

が。 「と言はる。

「連れまして来い、とのやうに、姫様、お言葉の懸つたかに思はれたで、私もの、鎧の袖に負ひ申す氣で、此へ參るつた。果して堤へ、お姿が顯はれたわ。

いや、何か、其も、此も、淺からぬ御縁ありげぢや。私が自分の心に較べて、尊い、可懐しい、姫島へ迎へ申さぬまでも、疾くに早や嬢様は、お山へ來てぢやも計られぬ。

屋根飛さんとか。

可怪いものでも何でもない、主が堤で出會うたは、正眞の嬢様ぢやが、實は、最う、世に亡い人ぢや

よ。

「えゝ！」

「主は知るまい。今年夏のはじめであつた。・
 ・花畑が埋められる、・
 ・一粒、分けてはくれぬで、嬢様は餘りの本意なさ。
 夜、の、・
 ・鎧を持つて、あの花畑へ忍んで
 行かれた。

これを、唯一人で、秘しがくしにさるれば可いに、
 垣根もない畑中ぢや。

鈴蟲採など智慧つけられて、そゞろあるきに何時
 も連れらるゝ、・
 ・あの二階家の裏の百姓家
 に小娘が、一人ある、十三四に成るぢや。手絡の、
 半襟の、簪の、と随分目を懸けて居なされた。

夜々半行くのではありません、轢死の多い堤の下なり、
 一人では氣味が悪い。また何も、人に秘すほどのも
 のではないので、其の親たちも承知の上で、此の、
 供したのが破滅の基よ。

其の日、晝の中から其の心を得させてあると、此の
小阿魔が又、古今汚い根性。

御機嫌とりのおべつかもの、誰でもくれい、もの
欲や。豫て、それ、花畑の金齒にもお齒向いて、領
元に着いて居た。で、あらを告げれば嬉しがる、當
の對手の嬢様が、花ぬすみを、日暮方に、べちや/
と内通したわ。

意恨はないが、嫉ましい、あの美しい顔に泥を塗
らうで、下女下男、もよほし連れて、手ぐすね引
た、おとし穴、の。

おいとしや、然うとは夢にも知りなさらず、月下
に荒れた花畑、早や、うら枯れても見ゆるのを、し
よんぼりと影薄く、涙組んで立ちなすつた。いつぞ
や丈長の栞したは、此のあたり、と■はして居られ
たぢやらう、・・・話す中にも察しられる。

忽ち、おも屋の門、背戸、動揺めいて、

『やあ、花泥坊。』

と下男が飛着く。下女が出る。金齒も、ぬつと練出したわ。

「大それた、これは何うだ。」

「近頃畠を荒すのは、此の姉に極まつた。」

「東京ではやるさうな、婦人の萬引は此のお方。なぞと言ふ。」

小阿魔は故とぎやあ／＼泣く。

「御懇意は願うても、人のものは人のもの、此では世間が濟みますまい。」
と、ねつとりと金齒が談ずる。

騒動が豪いで、人が出た。盆踊りが崩れたやうよ。

嬢様は身もよもあられず、袖をくひしばつて居なすつた。

袂の下の鐙の端を、金齒めが見つけての、
「兎に角、證據をお取り。」

と言ふ。

下男が無手と取るのを、振拂ふと、手を舉げて打たうとしたが、吃と顔を上げなされた、凄いやうな美しさに、思はずあとへ退つたげなが。

あゝ、生憎な。恰も來たのが、夜更のそれ、主が怯えた貨物汽車ぢや。

空走るやうに、衝と、流を一飛、花笠堤へ。

雪のやうな切の端と、美しい血が残つたばかり、死骸は黒髪もなかつたさうな。

いや、お山の繡眼鳥の鳴く音の悲しさ。御主人の供養にとて、姫島へ来て放しなされたが、人や梟に取られぬやうに庇つて欲しい、と言ひなさる。

お山は勿論殺生禁斷。が、不心得なものがあつたら、薙刀で拂ひます、と仇口まじりに承合うたれば、手を合はせて喜んで居なされたよ。

其の鳥がの、お山へ参詣に見える毎に、近い枝へ下りて来ては、嬢様に向うて鳴き／＼した。山路を下りらるゝと、坂の下へついて廻る。で、人にものを言ふやうに、何か話しては行かれたものぢや。が、其の時の聲の悲しさは！まさかとは思ふが、氣に成つての、里へ出て風説を聞いた。

世も末ぢや、とトボンとして、其のあとを吊ひ／＼、花笠堤を此處か、と通る、と無慚や、草に金脚、珊瑚の筭。

見覚えのある指料ぢや。押戴いて、の、御山の清水で清めた上、三日精進齋した上、御罰もあらば私に當れ、と訴訟申して、奥の院の、其の箱せこに秘してあるぢやよ。

あゝ、月の良さに見えられたか、眞に花の女神ぢやの。

伊之助は眞蒼に成つて、ぶる／＼と震へて居た。

「和尚さん、」

と眞直に突立つて、

「おう、お難有はお前の役だ。私あ其の、光り物が屋の棟どころを一番遣らあ。來ねえ、え、私が鎧武者も兼帯だ。お前さんは、唯見届けりや可い、さあ、おい。」

と重さうな草摺長に、あせつて、伊之助が、手を取ると、法師、忽ち崩れるやうに、温顔に笑を湛へて、

「何しか、主にばかり働かせう！ 私も、そんな事は大好ぢや。」

さて、誰の目にも見えなかつた。が、花笠堤を足竝揃へて、卯花緘と印半纏。

土手下の小川を越すのに、薙刀の柄を棹に取つて、一人は鎧をゆらりと越えた。

明地の半ばに、伊之助がシヤヴルを入れたあたりは、あはれに白い撫子が、ちら／＼と咲いて居たのである。

屋根飛の身の軽さ、廂合から階子を探して、どん、と掛けると、金貸の其の屋根へ。

具足の重量に、よろ／＼と惱むと見るより、甲首を顛卷の頭に乗せ、背に負うて、伊之助は大雑刀も搔取つて、する／＼と上つたが、輝く、匂、物具は、さら／＼と風に鳴つた。

「それ、」

と下ろす、と足が、近づて、和尚は夢に尻餅を搗いて、扇を膝に、ぐたり、と堪へる。

屋の棟の頂上で、

「ありや、りや！」

と雑刀を揮つた、と思ふと、伊之助石突を逆に取

つて、

「金齒め。」

と丁と斬る。

「きやつ、」

と魂消る女の聲。

仇打の手應を見届ける、と伊之助は濱邊の船へ仰
向けに寝に行つた。

花笠堤を薙刀擔いで、ゆら／＼と行く法師の姿。
眉庇下りに鋏形低く、鋸を揺つて歌ふを聞けば、

「・・・山果庭に落ちて朝三食秋風に飽き、
柴火爐に宿して夜薄の衣寒氣を防ぐ・・・」

と蟲の音寂しき連節や、鎧の袖に月白し、曉方の
霜や置くらむ。

【完】

